



新釋令義解

十一

73
6374
8



新釋令義解

十一

神祇

3
6874
8

新釋令義解第十

神祇

新釋令義解第十

勢州祠官

田守良

著

五味均平蔵



神祇令

謂天神曰神

地神曰祇

天神ト天ノ坐マシ神地神ト地ノ社ヲ祭祀ス令テ條ト集

解ル案ニ祀ス天神祭地神令耳ト何レ如ク同解ル自ラ天而下リ坐シ曰ク神就

一ノ天神ト下リ坐シ神武紀ノ敬ム祭ス天神地祇古事記ノ定ム奉ル天神地

祇之社ト天武紀ノ十年正月巳丑詔畿内及諸國修理天社地社神官

紀中ノ神祇ト記ス和名抄ノ天神ト和名ト安カ豆ト地祇ト和名ト久ク豆ト加カ三ノ日

次ニ祭ス品ト訓ス皇國ノ神祇ト敬ム祭ス給ル神代紀ノ高ク皇ノ産ル靈ヲ

條夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則可以神事云々大已貴神



報曰云吾所治頭露事者皇孫當治吾將退治幽事と皇孫命の天
降す時不既く定められ皇孫尊は御食國の顯露ふる庶政を治め
給へも神の治の給ふ幽事の政人への心も量り知るべきなりと何
事も神祇を祭り其御心問ひ知て食國の事故聞食を傳ふる事
大己貴神の御報を考ふる此神一柱の問ひ奉る事と云ふ事あり
然るに神代紀古事記に見えず麻豆利古止古止と古事記
後神代紀古事記に見えず麻豆利古止古止と古事記
傳へ給ふ神祇八井耳余讓於神津名川耳尊曰云汝光臨天位以承
見由給ふ神祇八井耳余讓於神津名川耳尊曰云汝光臨天位以承
皇祖之業吾當為汝輔之奉典神祇者と云ふも天白雲の食國の政を輔
け奉らむと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
欽明紀十三年冬十月百濟王遣使獻釋小物部尾與大連中臣連
鎌子同奏曰我國家之王天下者恒以天地社稷百八十神春夏
秋冬拜為事の常典を云ふ同十六年二月百濟王の殺す人十由奏条
蘇我卿曰昔在天皇大泊瀨之世汝國為高麗所逼危甚累卵

於是天皇命神祇伯敬受業於神祇祝者延託神語報曰屈請建邦
大己之神往救將亡之主必當國家謐靜人物又安由是諸神往救所以社稷
安寧原夫建邦神者天地割判之代草木言語之時自天降來造立國家
云々之神也頃聞汝國輟而不祀方今後悔前過脩理神宮奉祭神靈國可
昌盛汝當莫忘心とある我見る一
て佛教を尊び大臣ふり神祇
を祭る其國の榮ゆべき教を告曉せり 孝德紀大化元年七月戊寅天皇詔阿
倍倉梯麻呂大臣蘇我石川萬侶大臣當導上古聖王之跡而治天下復
當有信可治天下已卯天皇詔 以悅使之路庚辰蘇我石川萬呂大臣
奏曰先以祭鎮神祇然後應議政事是日遣倭漢直比羅夫於尾張國
忌部首子麻呂於美濃國課供神之幣とありも新政を施行もんと

大臣等下詔問給ひ一我神祇を祭り其後小政事を議るべき事一勅答
奏せし御代く不傳へ來一古風を申せしふりかく政事をふし給ふ

ふはまの神祭でありて神の御心を問ひ奉るは古今ひとの例も有

彼異国の王の己の己の教をかく皇國は萬國を尊

此令篇首小神祇官神祇令を置かる義をも曉し一官職の始

政令の篇首小神祇令を載るをいふ唐貞觀令をも

凡天神地祇者神祇官皆依常典祭之 謂天神者伊勢
山城鴨住吉出

雲國造齋神是也地祇者大神大倭葛木鴨出雲

大汝神等類是也常典者此令所載祭祀事條是

此天神地祇は祭祀の官を置れ其神祇官の人の掌るをいふ 此令の始めをいふ 明らかり記し

皆依常典祭之は天神地祇の祭祀皆して常典は恒例典式の定めあ

るをいへば即ち此令に載たる祭祀の事條は是常典なり 臨時祭祀は 令條の外なり

れは載 聖武紀天平三年正月乙亥神祇官奏庭火御竈四

時祭祀永為常例と云ふは常祀不定めらるる例なり 官奏しかく定

延喜臨時祭式小凡常祀之外應祭者隨事祭之非辨官處分不得預

常祭と記せり考課令に神祇祭祀不違常典為神祇官之最とあれは古

か、る定めぬは 常典不違ふは犯令 註小天神五處地祇五處に載せし

了は據所あり一 天武紀朱雀元年七月癸卯奉幣坐於紀伊國國懸神

飛鳥四社住吉大神 飛鳥四社は神名式に大和國 持統紀六年五月庚寅

遣使者奉幣于四所伊勢大倭住吉紀伊大神十二月甲申遣大夫等奉

幣 高市郡飛鳥坐神社四座とあり

下

新羅調於五社伊勢住吉紀伊大倭菟名足とのみ見ゆ
大和国添上郡宇奈大理坐高御魂神社と云ふ此神なり
伊勢鴨住吉三所は神名式小伊勢國度會郡大神

宮三座度會宮四座山城國愛宕郡賀茂別雷神社攝津國住吉郡住吉
坐神社四座と見ゆ山城鴨と云ふ在葛木鴨小巴けいあり
鴨祭は文武紀二年三月辛巳禁山背國賀茂祭日

出雲國造齋神は神代紀小高皇產靈尊
給當主汝祭祀者天穗日命是也天穗日命者出雲國造等祖也と見
ゆれは其氏人の祖神と以齋神と在是あり

式不出雲國意宇郡熊野坐神社は須佐能男尊
の御魂をまつれと皆天神なる住吉神を此中不記せは信か神代
此神社不はありと紀橋之檍原小其底箇男命中箇男命是住吉大神矣
紀橋之檍原小其底箇男命中箇男命是住吉大神矣御被り
至て成坐神功紀審神者不於日向國小門之水底所底而水葉榎之出居神
あり

名表箇男中箇男底箇男神之有也云表箇男中箇男底箇男三神誨

之曰吾和魂宜居大津津中倉之長峽便因看往來船於是隨神教以鎮
坐焉とあり在伊弉諾尊の檍原御潔の時不成坐て神功皇后の御代まで

も同水底不坐てを見ろ一
天不坐神小あり大神大倭葛木鴨住

神名式大和國城上郡大神大物主神社大神は即ち大三輪神あり古
一 同郡倭坐大國魂神社此神も大宮地靈の神なり葛木鴨住

同國葛上郡鴨都波八重事代主命神社あり出雲大汝は同式不出雲
國意宇郡杵築大社と云ふ此神社不坐て大已貴神と云ふ稱せは於

保奈母智の此四神は地祇なり此中不國縣飛鳥菟名足神社を載せは
訓をせしめり出雲國造齋神を杵築大社といはるは後の
定めぬて記せらるる撰者等の意して記せり詳なりと
天神地祇の神社はいと多かる出雲國造齋神を載せしめり
常典者

此令所載祭祀事條は此篇なる十九度の諸祭をいふ
此篇は唐祠令の法を
取記せしは白風不
あひく漏れし事多かり唐禮樂志凡歲之常祀二十有二冬至正月
上辛祈穀孟夏雩祀昊天上帝于圓丘季秋大享于明堂臘蜡百神于南
郊春分朝日于東郊秋分夕月于西郊夏至祭地祇于方丘孟冬祭神州
地祇于北郊ふと二十二祀の名を記せり此令不仲春季春子孟夏ふと記せしは彼
定めしよりて月をいも
専ら唐風ふれしものあり

仲春祈年祭

謂祈猶禱也。欲令歲災不作時令
順度即於神祇官祭之故曰祈年。

仲春は二月あり

祈年は禱歳の如し其年の豊熟を神祇に祈禱

且祭る種あり集解不為令歲稔祭之大歲祭也と有り

年は稔あり
米穀一度熟

成の義を取て一歳を一年といふなり祈猶禱は祝詞式祈年小皇
周禮鄭玄註不見の説文不禱告事求福也とある義あり祝詞式祈年小皇
神等能前モフカ白久今年二月ハシメシ御年初將賜登シシテ為而皇御孫命云云
あり如く當年嘉穀ナカハヒ農作の初め天神地祇の祭り有り註不

歲災不作は洪水大旱大風蝗蟲の災害のふきせし
水旱風蝗の害作れは
いしく嘉穀を傷ふ故あり

時令順度は寒暑の時節其常度不從ひて違ふをいふ
寒暑は陰陽不同
時令は四時の政令あり

皇極紀元年十月云云是月行復令無雲雷とありソレは尚書洪範の義を取あり
禮記月令篇小春行夏令則雨水不時春行秋令則其國大水寒氣總至とある類は
時令の度不順宗神紀小風雨順時百穀用成家給人足天下大平矣と有り如

く歲災不作時令順度不從ひて違ふをいふ
神祇官に祭る故に祈年を稱へる不
祈年の字は詩經雲漢詩に祈年孔鳳注小祈年孟春祈
穀于上帝孟冬祈來年于天宗是也と見え異國は兩祭あり此祭の見えしは

文武紀大室三年二月戊戌朔庚戌是日為班大幣馳驛追諸國國造等入京

慶雲三年二月庚子是日甲斐信濃越中但馬土左國一十九社始入祈年

幣帛例其神名具と記せり天武紀四年二月甲申祈年祭始といふは公事
神祇官記根源不同紀四年正月戊辰祭幣諸社といふを見

誤し四時祭式小二月四日祈年祭神三千一百三十二座
大四百九十二座神祇官
小二千六百四十四座

祭神七百三十七座とあり
二千三百九十五座は
諸國に祭る神祇の員あり

季春鎮花祭 ハナシヅメ 謂大神狹井二祭也在春花飛散之時
疫神分散而行厲為其鎮遏必有此祭

故曰

鎮花

季春は三月なり 鎮花は三月花の散落了時疫神の四方に分て散りて

疫厲を流行せむる故に其神靈を豫免鎮め知らず流行せ過むるを此祭に

あり是を鎮花といふ ハナシヅメ 花の散る時不邪神を鎮め過むるの名不買り今も疫厲

は和名抄に説文曰疫 音役衣夜美 一民皆病也 衣夜美は唐民の役課小使も

度岐乃介は時の氣にて 云度岐乃介 癘阿之岐 悪疾也 瘧鬼 和名衣也美乃 訓で 尔雅

邪神の氣を觸る名あり 瘧夜万比 疫癘也病氣流行中人如魔厲傷物也疫疫也有鬼 註大神狹

役不往也此病は神靈を狀に見らんは古より人の恐れあり 井二座は神名式大和國城上郡大神大物主神社同郡狹井座大神荒魂神社

此は大三輪神のせし 臨時祭式三月祭鎮花祭二座大神社一座狹井社一座

御魂を祭る神社あり 臨時祭式三月祭鎮花祭二座大神社一座狹井社一座

と見か 此祭も後了は毎年行なふ 集解鎮火大神狹井二祭也大神者

祝部請受神祇官幣帛祭之狹井者大神之鹿御靈也といへりかくて疫神を

鎮免過むる此二神を祭るは崇神紀五年小國內多疾疫民有死亡者且大

半矣同七年二月辛卯詔曰云今當朕世數有災害朝無善政取咎於神祇耶

蓋余神龜以極災之所由也於是天皇乃幸于神淺茅原而會八十萬神以

卜問之是時神明馮心倭迹々日百襲姫命曰天皇何憂國之不治也若能敬

祭我者必當自平矣天皇問曰教如此者誰神也答曰我是倭國域内所居

神名為大物主神時得神語隨教祭祀云於是疫病始息國內漸靜と

古事記 崇神御卷 此天皇之御世疫病多起人民死為盡尔天皇愁歎而坐神

牀之夜大物主大神顯於御夢曰是者我之御心故以意富多多泥古而令祭吾

御前者神氣不起國安平云即以意富多多泥古命為神主而於御諸

山拜祭意富美和之大神前ミマノとある此よりして後事も此二神社を祭る常

典とありふけむり三輪は天物主神社にて疾井は其荒御魂を祭りて此時不現を給ふ御魂を別り祭り和はつゝ此後

の事詳らふに現を給ふ御魂を別り祭る例多かり今疾井を

大三輪と共に祭るは何れは驚か置ふと有ける或人問けり

此大神は皇孫命を護り給ひ幽事を治め給へば天下の衆民を害ひ疾め給

ふ不守良答云

多て諸神を祭りて祈は幸ひ給へば急り疾れは崇りて何事量り知

りか神は皆神の御心ありとて御祭る急り給ふ事あり我怒り

度氣を流行せ給へば天皇の知食は御歎きの餘り御トをて御夢の

告めて此神の覺し給ふを知りて御祭有るは国内の女ら平らつゝ

もて神祇の朝廷を守り給ふ志々々人民の傷ひ害ひも怒り給ふ石とあり

を按く此疫を神氣と

いへば神の御所あるを知り

孟夏神衣祭

謂伊勢神宮祭也此神服部等齋戒潔清以參河赤引神調糸織作神衣又麻

續連等績麻以織敷和

衣以供神明故曰神衣

孟夏は四月あり孟は衣服令不四孟月

御服を奉る祭祀も集解小伊勢大神祭也といへり如し此祭の見

えりは持統紀六年壬五月丁未伊勢大神奏天皇曰云神郡赤引

絲參拾伍斤於來年當折其代大神の下不脱文あり一試し大

小や本文の如くしては大神の直小神官司大神氏人との文あり

文武紀大室二年八月癸亥勅伊勢天皇不申給ふと云こえていふあり

大神宮服料用神戶調とあり註不伊勢神宮祭と上平云へり

此祭古に神祇官の掌りて常典あり不後不改めて伊勢不掌るを

とるれは何の御代と定めり此令は神祇官常典を載るは

神御衣祭用物を記し延暦儀式帳不同祭は大神宮同祓宜物忌神部等の

仕奉る例を記し朝廷驛使の参入も見之は延暦年中以前かあり

系を引く或説不此祭り伊勢にて行せし神祇官は惣掌の故り載るるに
るは証言あり此官不預りて諸国祭祀の總掌を載せしを猶りし（きし）此一祭
を記せしは神戶調庸は官の裁断して用度物を下行
す處分の拘りし故あり後不官と伊勢各別りたりあり
註不參河赤引神

調系は古へ參河國神戶より奉り官の處分を受けて服部の織奉るる也（神戶の義は下）

（小云）天武紀六年壬五月丁未不神郡赤引絲參拾伍斤（ノサキノイト）延曆内宮

儀式帳（御調荷前）赤引生糸四十斤神郡度會郡調先系と記して參

河國より奉るるを見えし熟考を不神名式云同國室飲郡赤孫神社和名

抄不同郡赤孫（安加とあり）安加比古は赤引不似る名あり此御より神調

波止利とあり古へ此氏人の住つる地あり（比古）比古は赤引不似る名あり此御より神調

國より服料奉る事を聞傳へての説あり（比古）比古は赤引不似る名あり此御より神調

赤引は明曳（アカヒキ）儀式帳不明曳御調系とあり明は清く清心と記せし

曳は糸を引出し（引）引は手もて引出すもて復引の手引の糸の打もてと歌

（集不夏麻ひく）即ち麻戒潔清をり仕奉る糸の稱なり御調は御貢の如

調の義は賦（賦）役令不いり此服部氏人は赤引糸をもて御衣を織奉り（和妙の御衣）

人は麻（アサヲ）を紡ぎて御衣を織奉り（荒妙の御）敷和（アサ）は麻樹を全く剥取り

麻の糸（ツ）績（ツ）むくを不赤引（ツ）對（ツ）へいり（比古）比古は赤引不似る名あり此御より神調

者宇都波多（ウツハタ）訓めり宇都波多（ウツハタ）付全機（ウツハタ）を不（ウツハタ）

俗（マ）マロツホニテ機（マ）不織（マ）るよりあり敷和の字義（マ）不（マ）

連姓あり（此二氏の職掌姓氏は）集解不臨祭之日神服在右麻績在左也

此常祭也と二氏並仕りしは大神宮式を考ふべし

大忌祭（オホミ）謂廣瀨龍田二祭也欲令山谷水變成甘水

浸潤苗稼得其全稔故在此祭也

大忌は官人の忌清まり仕奉るるを以て廣瀨の皇神を稱辭あるべし（此神）

は神名式小大和国廣瀨坐和加賀宇賀賣命神社とあり
今同郡河合村小寺で俗河

令神社とし小廣瀨
川の河曲小寺に故あり
五穀の靈神小ませり
註小廣瀨龍田ニ祭也と彦達へ

大忌祭は廣瀨風神祭は龍田にて各別あり
此二社は同日不祭と云く故不まかりてかく註せり
天武

紀四年四月癸未遣小錦中間人連大蓋故木不連大大山中曾祢連韓大祭大

忌神於廣瀨河曲同五年夏四月辛丑祭龍田風神廣瀨大忌神とありは

大忌祭は廣瀨ふるちと決ふ
註説は廣瀨龍田同日の神名式小大和國廣瀨坐和加賀賣命神社とあり此神あり
今同郡河合村といふ小寺ありて河合神社と呼り即ち廣瀨川の河曲

小寺に故四時祭式小大忌風神祭並七月四日太政官式小大忌風神二

祭者四月七月四日祭之式部省四月七月朔日サタメ點定社別王臣五位以上各

一人申送辨官下知大和國式部式不凡大忌風神二祭使王臣五位王二人臣二人若王五位不足者聽王四位但其薄四

七兩月點定送臨時祭式小凡春日廣瀨龍田等社庫鑰匙者納置官

祭祭使官人臨祭請取事畢返納返納は神祇官欲令山谷水變成甘水浸

潤苗稼得其全稔故在此祭也とあり山谷以下十五字は本文ありべきは何れの

書不ありしなり思ひ得べきなり此祭祀は年穀の祈りして廣瀨川水を農田灌

ぎ作しは其義を註せぬありむ註者の説あり天武紀五年夏六月大旱

遣使方捧幣帛祈諸神祇亦請諸僧尼祈于三宝然不雨由是五穀不

登百姓飢乏秋七月壬午祭龍田風神廣瀨大忌神と見え此祭當年より十年

祝詞式廣瀨大忌祭皇神能御名乎白久御膳持留若宇加能賣能命止

御名者白且云云倭國能六御縣乃山口坐皇神等母云云皇神等乃

敷坐山山乃自口狭久那多利尔下賜水乎甘水登受而天下乃公民

取作礼留奧津御歲乎惡風荒水尔不相賜汝命乃成幸波開賜者云云

とあるを照考ふへ此神の敷坐山山より水を下集解小廣瀨立田祭

給ひあまの田を養ふ御靈を稱へり

自山谷下水甘水成而為令五穀成熟祭也トナリテ 同甘水は田稼を
養ふ水をいふ祝詞式 小雨甘久風和ハルカニ 甘雨も同義あり詩の小

祈甘雨注云長物則為甘雨害物則為苦雨爾雅小甘雨時降萬物以
嘉トク 甘雨甘水の甘は皆同一今も農夫の言をきくや山谷より出る水
は冷やうりて悪一ニ町をかりの下流は暖氣 元正紀養老六年六
月丙子詔奉幣名山奠祭神祇甘雨來降黎元失業トク

三枝祭 謂率川社祭也以三枝花 風神祭 謂亦廣瀨
飾酒罇祭故曰三枝也 龍田祭也

欲令冷風不吹稼穡滋登故有此祭凡讀此四祭者
先讀神衣其次三枝其次大忌其次風神與公式令
連署義同以下
諸祭並准此例

三枝祭は三枝の花をもて御酒の罇ツヅに飾れる故に三枝と祭名を負ひ
罇は酒 三枝は三方の莖枝のあるをいふ草名あり姓氏錄三枝部連 顯

宗天皇御世諸氏賜饗燕干時有三葉草獻之因賜三枝部姓
顯宗紀小御苗者如三枝相齒坐オシハニスといへる三枝ある草を何すまれ云へ

萬葉集第五小三枝之中を寝む也古今集の序小十葉草の三葉
四葉ヨツハもよめり三枝は佐岐と點ヨミり此花を飾るは幸を祈る義を合

めり、和名抄小葛和名佐木久佐日本私記云福草又云草枝枝相殖
葉葉相當也アケルナリと記せり 福は幸小同葛字をかけるよりは詳かむらた

知るへ古今集の注小檜を佐木草といふは此殿は宇倍も富トクる云
り推量オモす密勘小佐木草は加良須扇といへるは今の射干シヤカと異ふ
り熟考オトふる小佐木は佐草サカ草クサもあむる古事記神武御卷小佐井河
の細書小其河謂佐井者於其河邊山由理多在故取其山由理草之
名號佐草河山由理本名云佐草とありげり百合は葉葉相當枝枝
相殖といふ了似つげりく万葉古今兩集の歌の状も志シりきキゆユりリ有ユき

註小率川者開化紀小遷都于春日之地是謂率河宮率川此云伊社箇波神名式

小大和國 添上郡率川坐大神御子神社三座率川阿波神社と記せり

公事根元注小今も春日社西方二十三町小率川明神ませり此神は大神御子を祭れり此神は大神御子を祭れり

解小伊謝川祭大神氏定而祭不定者不祭即大神族類之神也以三枝

花嚴鐔而祭大神祭供此云鹿靈和靈也氏宗は大神氏の嫡家あり其氏繼嗣の始哉

氏定此社は族類の神と上文小いひ又和魂鹿魂といへり而説如く見のれ神名式大神御子神正しくいへる從ふきあり

一説率川三枝別社也率川社南有三枝御子社諸神記書小件社右大臣是公建立也因茲南家苗裔行此祭也是公は藤原不比等公曾孫小大神古は四月祭常典是後

祭物三枝草を載るぬむ既く此儀の絶る公事根源三枝祭三坐率川此四時祭三月祭三枝祭三坐率川此四時祭三月祭三枝祭三坐率川此

見えて祭月の令式是後の例あり古は吉日を撰ひ祭らる或上酉と定むるも同三

風神祭龍田祭あり註小廣瀨龍田祭と云は違へり上云々如註大忌の時風神の時も同狀祭るふ龍田は神名式大和國平群郡

同月同日の祭別社行る混り龍田は神名式大和國平群郡今も立野村

龍田坐天御柱國御柱神社龍田比古龍田比女神社今も立野村此風神祭天御柱國御柱神を専ら祭り比古比女神も祭らる事き此

此事下天武紀五年四月戊戌朔辛丑七月丁卯朔壬午再度祭始記此

此は大忌祭同此四月七月兩祭毎年同狀記四時祭三月祭風神祭三座

龍田社七何り風神共不意田神も祭らる大忌祭は甘水を祈り此祭は惡風を

止の賜へ也申は祝詞式小龍田風五穀物乎始氏天下乃公民乃作物乎草

乃片葉尔至万天不成一年二年尔不成歲真尼傷故云云皇御孫命

大御夢尔悟奉久天下乃公民乃作物乎惡風荒水尔相都不

成傷波我御名者天乃御柱乃余國乃御柱乃余止夢尔悟奉久云云比

御名者悟奉久云云比

御名者悟奉久云云比

御名者悟奉久云云比

御名者悟奉久云云比

御名者悟奉久云云比

御名者悟奉久云云比

古神云比女神云皇神能御心平久間食氏天下乃公民能作作物乎

惡風荒水亦不相賜皇神乃成幸賜者云云何也集解釋記小世傳草木五穀等風

吹而枯壤之此時不知御神心即天皇齋或頭覺曰龍田小野祭二社同日共祭妹妹之神と記せるは祝詞の義なり字書小冷音田也妖氣也と記せり椽檣は殖へ

へる説陰陽の失錯ひて戻り暴風を云り椽檣は殖へソコナヤフ

斂むるをいふ種之曰椽斂之滋登は豊登の如し惡風の椽檣を暴ひ傷ら

む事を恐れて預て豊登をむ故祈り此祭を何と云り凡讀此四祭

者四祭は神衣大忌次等ありて先神衣祭次三枝次小大忌次小風神と云も三枝風神の祭なり公式令連署と同例以下諸祭も准へ知へと讀法を曉せし

習ひあり公式令連署と同例以下諸祭も准へ知へと讀法を曉せし

大忌風神同日の祭あり其間小三枝祭を載る故もむ公式令解小

日下主典連署大録大丞少丞少録記せし其次第は大小録大少丞

こ何へき證あり集解小文讀次第神衣祭大忌祭三枝祭仲冬之處稱

上對下耳先讀演次日祭乃可讀下外祭而先大嘗者依職員令所

次先後耳といはれ仲冬寅日鎮魂次上外相當下外大嘗と次第を讀へ

職員令本条小上外下外先つ神祇官次大政官とあり先後の例小

同しとふり此兩説は古へ明法家傳へ教授の法ふふへ一按り孟夏

仲冬諸祭先後の次第あり此説の如くふら其よりを志して令文小かく

載るきほ寅日と記せるをいふ職員令先つ神祇官次大政官とあり先後の例小

神衣大忌三枝風神等祭は伊勢大神宮祭五穀神祭大神族類神祭

風神祭古へは定日なく吉日を用ひしはかく次第を載せ後不定日

祭次第あり三月三枝祭四月四日大忌風神祭仲冬も上外相當祭下

外大嘗祭寅日鎮魂祭の相當は其當神社を祭る下外小天皇の遙祭あり

上外は所司のまつ神祇を祭る寅日は天皇の御魂を祭れり職員令小神祇

官を先り 大政官を次り載す 前後は皆同理なるは尊む方をもて次第
ていふ事むして教授は其祭祀次第を曉せし讀法のみを殊なる事

職員令に陰陽師六人陰陽博士一人陰陽生十人と記せり令私記
云問陰陽師其位博士其位而居陰陽博士之上答博士與生不可相
隔作如此耳と有り博士と生と隔て記せぬの説にて委しかり官位令に
陰陽博士正七位下階陰陽師從七位上階と位次とあるは先づ陰陽師と
記せざる疑へるあり是も諸祭の尊きかへ成まつ載る例不同しかり
そは陰陽師は禁中長上の職博士は教授の職にて其事輕重あるを似

季夏月次祭 謂於神祇官祭與祈年祭 鎮火祭 謂在宮城

四方外角下部等鑽火而 道饗祭 謂卜部等於京城
祭為防火災故云鎮火 四隅道上而祭之

言欲令鬼魅自外來者不敢入京師
故預迎於路而饗過焉

最中は八月十五夜をいふ

季夏は六月あり 月次は月並と云り如 毎月幣帛を奉るべきは當月
一度奉るをいふ正月より六月まで七月より十二月まで次第奉るを聚

め置て一歳に兩度御使す 神祇官にて領奉るなり 古歌に天の河を月
と秋の最中なりと云り詠めしは毎月の月次祭をいふなり 今夜
月の次を計へ来て今夜は最中と知るなり 四時祭式は月次祭奠幣案上神三百

四座並大社一百九十八所前一百六座右所祭之神同祈年より大政官式は凡
六月十二月十一日月次祭奉班幣帛大臣以下集神祇官如祈年儀と見ゆれば其
儀は祈年祭と同なり 祝詞式月次祭祝詞は 大御巫能辭竟奉皇神等
能前承白久神御魂高御魂坐魂足魂玉留魂大

宮賣御膳都神辭代主登御名者白氏 文武紀大宝三年秋七月癸酉詔曰
辭意奉とありは神祇官にて祭らるる神なり 在山背國乙訓郡火雷神每旱祈雨頻有徵驗宜入大幣及月次幣例と見ゆ
れば既に此祭は定まらざるなり 此月次祭の夜神今食といふ行事あり 何頃
めありし或書に元正天皇靈龜二年より始りしと延暦年中より見ゆれば令後の制
三代實錄に貞觀四年六月十一日戊申晨月次祭夜神今食祭とあり内裏

小禁忌の事あれも神祇官にて行はしむは桓武紀延暦九年六月戊申於神祇
官曹司行神今食事先是頻屬國哀諒闇未終故避内裏而於外設焉とある
孝國哀は去年十二月乙未皇太后崩今年壬三月丙午皇后崩とある
皆國忌の例にて主上の諒闇も終らざるへし四時祭式も六月祭小供神今食
料云云神祇官官人率神部等夕曉兩般参入内裏供奉其事す大殿祭
右神今食明日平旦す月次祭不前祭五日充忌部九人木工人令造供神
調度祭畢即中臣官一人率宮主及卜部等向宮内省下定供奉神今食之
小齋人と記一月次祭訖りて此行事ある例なる一此神今食を古
神の儀ときこゆれば新嘗を今食と祭名を改められし其もはひしと言ふべし
其義をもて美阿倍まゝ伊麻御初も訓へし今と云は去年の神稻を初らる
残し置て季夏を春て穀と御饌神酒を醸り饗奉るなり今も民間にいへる今
磨の米といふのふて殊更甘美きよといへり
新穀と同状り供神の行事ありてきこゆるなり
註一月次祭は神祇官にて

行ふも祈年祭と同儀は上いへり如唐人宅神祭は心得かき記一状さる
唐人のみ祭にて官人有位已上宅神を祭るなり如
或説了此宅神の心得かて小
電神をむといふは中古不
民戸を幾烟と云若干電處と計ふ故あり古事記小奥津比賣余亦名大戸比賣
神此者諸人以拜電神者也と記せり古へ諸人の宅別不此祭りありしと云
江次第正月元旦四方拜の祭不唐人儀云
按不電神を宅神といふへもあらず
電神を拜む事見ゆ唐人宅神と云ふ似たり

れは其宅の神にて民神をかくいへるなり宅神は即ち其家の續日本後紀承和
先祖祭ときこゆればあり

元年二月辛丑小野氏神社在近江滋賀郡勅聽彼氏五位以上每至春秋之祭不

侍官符永以往還す同四年二月癸卯是日勅聽大春日布瑠栗田三氏五

位以上准小野氏春秋二祠時不待官符向在近江國滋賀郡氏神社と格を載

せり神名式同國滋賀郡小野神社二座此外大小七座かく氏神は春秋の
と見ゆると自餘三氏の名負ふ神符見えん考へり

二祭見ゆれば月次祭も春秋二度祭る例准記せり義唐人は諸人の
事ありしなりかく月次祭を唐人氏神祭に準記せり古へ每氏小氏神

を今も在曉りやなき心ちるひたる後世も見ゆれば混ひたり中く物遠き
註説あり當時の理なり叶ひたり

後傳ふる書はかく註せりき事なり鎮火祭は火神荒ふる災を鎮め和
ふる祭の名あり神靈を鎮めたる奉祝詞式鎮火祭小神伊佐奈岐伊佐奈美

乃命妹背二柱嫁繼給氏イマセ云云麻奈弟子火結神生給氏ホスヒノ美保止被燒氏イハカクシ
坐氏ヨモツヒテヤカ至坐而所思食久吾妹余能シロメス所知食上津國アルテ

心悪

子乎生置氏米^キ止^シ宣^カ氏^カ返^カ坐^シ氏^シ更^シ生子^ミ水神^ミ匏^ミ川^ミ菜^ミ埴^ミ山^ミ姫^ミ四種^ミ物^ミ乎^ミ生^ミ給^ミ
氏^{コノ}此^{コノ}能^{コノ}心^{コノ}惡^{コノ}子^{コノ}乃^{コノ}心^{コノ}芒^{コノ}比^{コノ}波^{コノ}水^{コノ}神^{コノ}匏^{コノ}埴^{コノ}山^{コノ}姫^{コノ}川^{コノ}菜^{コノ}乎^{コノ}持^{コノ}氏^{コノ}鎮^{コノ}奉^{コノ}止^{コノ}事^{コノ}教^{コノ}悟^{コノ}給^{コノ}

支^シとある此儀あり火災を預免防かむとて此祭なり故に鎮火と號へり

註小枉宮城四方外角^{スミ}下部等鑽火而祭^{スミ}と云宮城の四隅は四時祭式鎮火

祭於宮城四隅祭^{スミ}と云り即ち宮城四面の外角あり京極にて此行事あり
羅城外よりあり

同式小祭料^{スミ}藁四圍^{スミ}と云り下部等新火を鑽り藁を焼て祝詞を

申をふる^{スミ}藁を祭物と云は焼く料あり^{スミ}臨時祭式^{スミ}宮城四隅疫

其祭物^{スミ}藁四圍^{スミ}榻^{スミ}棚^{スミ}四脚^{スミ}とあり焼く料と云は疫神はとまれ火神を鎮

むとて藁を焼く向ひ火つと云り如い^{スミ}考^{スミ}匏^{スミ}四柄^{スミ}あり川^{スミ}菜^{スミ}

の見えぬ^{スミ}古^{スミ}異^{スミ}あり道^{スミ}郷^{スミ}食^{スミ}祭^{スミ}は^{スミ}鬼^{スミ}魅^{スミ}惡^{スミ}神^{スミ}の^{スミ}来^{スミ}る^{スミ}道^{スミ}路^{スミ}不^{スミ}迎^{スミ}へ^{スミ}出^{スミ}て^{スミ}饗^{スミ}奉^{スミ}り^{スミ}過^{スミ}む^{スミ}

祭^{スミ}り^{スミ}あり^{スミ}魅^{スミ}は^{スミ}和^{スミ}名^{スミ}抄^{スミ}不^{スミ}騫^{スミ}魅^{スミ}和^{スミ}名^{スミ}須^{スミ}大^{スミ}萬^{スミ}鬼^{スミ}類^{スミ}也^{スミ}野^{スミ}王^{スミ}曰^{スミ}騫^{スミ}魅^{スミ}老^{スミ}物^{スミ}精^{スミ}也^{スミ}祝^{スミ}詞^{スミ}式^{スミ}

道饗祭^{スミ}小^{スミ}大^{スミ}八^{スミ}衢^{スミ}尔^{スミ}湯^{スミ}津^{スミ}船^{スミ}岩^{スミ}村^{スミ}之^{スミ}如^{スミ}久^{スミ}塞^{スミ}坐^{スミ}皇^{スミ}神^{スミ}等^{スミ}之^{スミ}前^{スミ}尔^{スミ}申^{スミ}久^{スミ}八^{スミ}衢^{スミ}比^{スミ}古^{スミ}八^{スミ}衢^{スミ}比^{スミ}賣^{スミ}

久那斗止御名者申^{スミ}辞^{スミ}竟^{スミ}奉^{スミ}波^{スミ}根^{スミ}國^{スミ}底^{スミ}國^{スミ}與^{スミ}鹿^{スミ}備^{スミ}踈^{スミ}備^{スミ}来^{スミ}物^{スミ}尔^{スミ}相^{スミ}率^{スミ}相^{スミ}口^{スミ}

會事無^{スミ}氏^{スミ}下^{スミ}行者^{スミ}下^{スミ}乎^{スミ}守^{スミ}理^{スミ}上^{スミ}往^{スミ}者^{スミ}上^{スミ}乎^{スミ}守^{スミ}理^{スミ}夜^{スミ}之^{スミ}守^{スミ}日^{スミ}之^{スミ}守^{スミ}尔^{スミ}守^{スミ}奉^{スミ}とあり此

衢神久那斗神の義は神代紀に見ゆ和名抄^{スミ}道^{スミ}祖^{スミ}比^{スミ}神^{スミ}を^{スミ}祭^{スミ}る^{スミ}は^{スミ}黄^{スミ}泉^{スミ}國^{スミ}と

和名佐倍乃加美岐神和名布奈止乃加美とあり神等あり^{スミ}比^{スミ}神^{スミ}を^{スミ}祭^{スミ}る^{スミ}は^{スミ}黄^{スミ}泉^{スミ}國^{スミ}と

り悪神の入来るを支障へて是より来るを退め防ぐめ給ふ^{スミ}乞^{スミ}祈^{スミ}む^{スミ}事^{スミ}を

申^{スミ}し^{スミ}悪^{スミ}神^{スミ}を^{スミ}郷^{スミ}食^{スミ}て^{スミ}押^{スミ}ら^{スミ}む^{スミ}行^{スミ}支^{スミ}を^{スミ}照^{スミ}り^{スミ}考^{スミ}ふ^{スミ}悪^{スミ}神^{スミ}の^{スミ}令^{スミ}散^{スミ}り^{スミ}て

祭^{スミ}り^{スミ}も^{スミ}聖^{スミ}武^{スミ}紀^{スミ}天^{スミ}平^{スミ}七^{スミ}年^{スミ}八^{スミ}月^{スミ}乙^{スミ}未^{スミ}勅^{スミ}曰^{スミ}如^{スミ}聞^{スミ}頃^{スミ}曰^{スミ}大^{スミ}宰^{スミ}府^{スミ}疫^{スミ}死^{スミ}者^{スミ}多^{スミ}思^{スミ}欲^{スミ}救^{スミ}

療^{スミ}疫^{スミ}氣^{スミ}以^{スミ}濟^{スミ}民^{スミ}命^{スミ}是^{スミ}以^{スミ}奉^{スミ}幣^{スミ}彼^{スミ}部^{スミ}神^{スミ}祇^{スミ}為^{スミ}民^{スミ}禱^{スミ}祈^{スミ}焉^{スミ}又^{スミ}其^{スミ}長^{スミ}門^{スミ}以^{スミ}還^{スミ}諸^{スミ}國^{スミ}

守^{スミ}若^{スミ}人^{スミ}專^{スミ}齋^{スミ}戒^{スミ}道^{スミ}饗^{スミ}祭^{スミ}祀^{スミ}とあり^{スミ}同^{スミ}註^{スミ}小^{スミ}部^{スミ}等^{スミ}於^{スミ}京^{スミ}城^{スミ}四^{スミ}隅^{スミ}道^{スミ}上^{スミ}

而祭之四時祭式^{スミ}道饗祭^{スミ}於^{スミ}京^{スミ}城^{スミ}四^{スミ}隅^{スミ}祭^{スミ}と見^{スミ}の^{スミ}集^{スミ}解^{スミ}小^{スミ}京^{スミ}四^{スミ}方^{スミ}大^{スミ}路^{スミ}最^{スミ}極^{スミ}

下部等祭^{スミ}牛^{スミ}皮^{スミ}並^{スミ}猪^{スミ}鹿^{スミ}皮^{スミ}用^{スミ}也^{スミ}此^{スミ}為^{スミ}鬼^{スミ}魅^{スミ}自^{スミ}外^{スミ}莫^{スミ}来^{スミ}官^{スミ}内^{スミ}祭^{スミ}之^{スミ}右^{スミ}京^{スミ}職^{スミ}預^{スミ}り

委^{スミ}く^{スミ}見^{スミ}ゆ^{スミ}れ^{スミ}は^{スミ}京^{スミ}極^{スミ}道^{スミ}上^{スミ}とて祭^{スミ}る^{スミ}を^{スミ}む^{スミ}鎮^{スミ}火^{スミ}祭^{スミ}所^{スミ}も^{スミ}京^{スミ}極^{スミ}は^{スミ}京^{スミ}職^{スミ}の^{スミ}預^{スミ}り

祭物は臨時祭式より牛皮二張猪皮鹿皮能皮各四張と記せり集解の説より
これに比皮を鋪設不用ふるは鬼魅を恐るむるより小きこゆ喪葬令の方相氏
をおしふるあらむとす此は外より來る惡神を京内に入らざり拒み官城外
深く考ふべき事なり

小迎て祭る行事あり 京極は京職式より京程南北一千七百五十三丈云云
南極大路十二丈羅城外二丈と有り 踐祚大嘗大被は於

羅城外解除止れと 道饗祭の外に疫神祭しこれに臨時處分あり
此四隅に羅城内ときき

臨時祭式に京城四隅疫神祭若祭官城四隅と宮城京城四隅の兩處にて祭
者准此

る例あり 京城は羅城 同式に畿内堺十處疫神祭見ゆ 五畿内堺外十
門外四隅ときき

野紀宝龜元年六月甲寅祭疫神於京師四隅畿内十堺同二年三月壬戌
令天下諸國祭疫神續後紀承和三年四月丙戌詔小宜令畿内七道諸

國云如有疫癘處各於國堺攘祭務在精進必期靈感と記せり 疫神祭と
は道饗祭

小合て疫神のみの祭とあり朝野群載より宮城四角四堺和尔堺會坂堺大
枝坂山崎堺と記せり在京師の四隅より宮城の四角よりあり山崎大江は山城國

御名にて撰津丹波の堺和尔會坂は和大近江の堺あり文武御代は大和國
勝原の地をませり大和の四堺あるべし京職式より九月神祇官畿内堺祭

差擔夫五人已上送之と有りは下部小從小人夫と此項は毎年堺祭りに有つ
まむむ四時祭式疫神祭物に藁四圍あり境祭を併せ考ふる小合は疫癘流

行の時毎戸より藁藁靈をさ出さしめ火をくめて野外に送る其藁靈の鬼形を
村境に焼き棄るものとあり是を俗に遠夜礼といふ遠夜礼は逐棄る義あり
野外にていづく火を焼くかと問はば大小兒同口小岐夜半品と呼へり岐夜半品

は饗路路にて此道御食祭の事をおつら云傳へるるむ遠夜礼のちあり小記せり

孟秋大忌祭 風神祭

此二祭は天武紀五年秋七月丁卯朔壬午小始て見え毎年祭り給へり 四時祭式より七
月四日と制を記す

季秋神衣祭 謂與孟 神嘗祭 謂神衣祭日 夏祭同 便即祭之

孟秋は七月季秋は九月あり 神衣祭は孟夏季秋兩度の祭りをいふ祝詞

式に伊勢大神宮 四月神衣祭 九月に記せり 四月九月十四日祭は同儀あり
諸祭祝詞云

神嘗は伊勢大神宮の祭りにて九月に熟る新穀を以て饗奉る祭名あり

嘗は那倍訓へ即ち新嘗の義あり 古事記傳に那倍は此那倍にて新嘗の義といへり此説に従ふ

祝詞式九月神嘗 祭祝詞 云常毛進留ツネモテマツル 九月之神嘗 乃大幣帛サケマツル 云云令捧持氏進

給布ツケ 在驛使の幣帛を奉るをいひし詞 同祝 神戸人等常毛進留 由紀

能御酒御贄懸 稅干稅五百稅ニハカケ 如横山久オキタラシシテ 置足成天ヲリ 祝詞式の

幣帛を奉るは元正紀養老五年九月乙卯天皇御内安殿遣使

供幣帛於伊勢大神宮四時祭式九月 伊勢大神宮神嘗祭右當月

十一日天皇臨大極後殿奉幣大政官式 小凡九月十一日行幸八省

院奉幣於伊勢大神宮其使者大政官預點五位以上云々 見ゆ

註不神衣祭日便即祭之と神衣祭の便をもて大嘗祭あるはいと誤

神衣祭は十四日神嘗祭は十七日なり代令文に神嘗神衣皆季秋の祭と連なり左神衣祭に幣使を發遣する其便不同使の祭に

おもひなりむ神衣祭に集解に即神嘗祭謂神衣祭日饌食等具字幣使の發遣は其例見えに

奈多利村吉津守に記せしはいふ事ともきこえに 神衣祭の日此四社も新嘗を奉るをいふや

仲冬上卯相嘗祭 謂大倭住吉大神穴師恩智意富 葛木鴨紀伊國日前神等類是也

神主各受官 下卯大嘗祭 謂若有三卯者以中卯為祭日不更待下卯也

幣帛而祭

寅日鎮魂祭

仲冬は十一月より 相嘗は古説小主上の諸神と相共 新穀を饗給ふ儀なり

相字によ 職員令官神祇 相嘗註小朝諸神之相嘗祭名者供新穀於至尊

也集解小上卯所司所行也下卯為以新穀供至尊所祭也と見えて神祇官にて

諸神に幣帛新穀を奉る行事なり仲冬は神戸調租官イカ 輸せり

其初輪の新穀を用ふるハツラサ 坂本不載延喜講書といふ不私記云調庸荷前ハツラサ先祭神祇號相嘗祭後奉山陵號

荷前ハツラサとあるは相嘗の那倍ハツラサはあまると調庸の先ハツラサより新穀の先を取て神祇を祭るとは同儀ハツラサにて新穀のみならず幣帛をも奉らる事あり中右記に相嘗供當年新穀事也是神今食新嘗祭同義之故也と見えて其儀は六月神今食の行事ハツラサ小同谷川氏説後漢書肅宗紀間祀注小正祭之外五月嘗麥十月嘗稻謂之間祀也ハツラサ間祀相嘗の間相同通といへり似る事ハツラサなら間祀にはあるに常典あり上外は十一月上旬の卯日を祭日と定

めらるる 田租は田令ハツラサ下凡田租九月中旬起輪四時祭式ハツラサ相嘗右預相嘗祭之社十一月上旬卯日祭之其所須雜物預申官請受付祝等奉班酒料稻者

用神税及正税とあり 祝等は諸國神社の神主より 天武紀五年十月丁酉祭幣帛於相嘗

新嘗諸神祇桓武紀延曆九年九月甲戌奉伊勢大神宮相嘗幣帛と相嘗の號を記せり 按て新穀の事をむねといへて新嘗祭といふ幣帛の方より相嘗幣帛といふこととすべき

大倭以下日前神以上九社を記し等類と廣く此九社の外をいへり四時祭式

十一月相嘗祭神七十一座とあり 神名式下大和城上郡穴師坐女主神河内高安郡思智神社大和十市郡多座弥志理都比古

神社同國葛上郡鴨都波八重事代主命神社紀伊國名草郡日前神社見ゆ大倭住吉大神は上ハツラサ云へり此外七十一座の神社の下に相嘗と記せし委くは

此八社の氏人は大倭已ハツラサ十大神輪津守住穴師神主師卷向神主池首

思智神主思智大朝臣ハツラサ富鴨朝臣城等神祇官小奉來て幣帛を受預り各當社を

祭らる七十一神社氏人皆同 神主各已下註は祈年祭祭下有へき哉是處にいへるは相嘗及所司の祭を曉せり

下外は當月下旬の卯日ありとれ其祭月小毎旬卯日ありと中旬卯

日を用ひられて下外を待りぬ例もいと心もとむを註し三り 毎旬卯日

ふ卯日ありと祭らるは舒明皇極天武の紀に見之中卯日は大政官式小新嘗

者中卯日祭之四時祭式ハツラサ中卯日新嘗祭といふ 此次は中卯日をのみ用ふる古儀あり大嘗

は主上の諸國神祇を遍く新穀にて祭らる大祀のハツラサなり 新嘗の大祀と

職員令ハツラサ神祇注小大嘗謂嘗新穀以祭神祇也集解小上卯所司所行也下外

以新穀供至尊所祭也といへり此日神祇を饗奉り至尊も始て新穀を食ひ

給ふことあり 相嘗祭より一代一度の太嘗 此祭は神代紀白皇孫天 小天照大

神勅曰以吾言高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒と神勅より始まり

齋庭之穗は神祇を祭り忌敬む 皇孫生 吾田鹿葦津姫以下定田

御殿の御饌をかく雅語小記せり マシタス 號狹田以其田稻釀天甜酒嘗之

神祇を祭り皇孫命も饗食給ふと見ゆ ト定田の稻を用ゆるは即ち 太嘗祭

は此時より始り 神武紀以下 清寧紀二年冬十一月依太嘗供奉之

料遣播磨國司山部連先祖伊與末目部小楠 此事顯宗紀小は白髮天皇二年

末目部小楠於赤石郡親 太嘗と記せと仁德紀四十年云是歲當新嘗之月以

辨新嘗供物と記 ニシテ 宴會日賜酒於内外余婦等清寧紀三年十一月戊辰宴臣連於大庭賜綿帛

新嘗畢り辰日小豊明節會 用明紀二年四月丙午御新嘗於磐余河上舒明

紀十一年正月乙卯新嘗蓋因幸有馬以闕新嘗歎 十一月新嘗あり(き)有馬行

不行せり其故を記せあり用明紀の 皇極紀元年十一月丁卯天皇御新嘗是日

皇太子大臣各自新嘗天武紀六年十一月己卯新嘗日云新嘗は見えて太嘗と云は

清寧紀のころみちれは此令も新嘗祭と傳へたり太嘗祭と載れは違へる小似れ

と然るはあらは太嘗は祭名新嘗は其實ト記し 主上の諸神祇を祭り

小て其實は新穀を嘗給ふをいへるものなり 右にひる書紀は一代一度行を

太嘗あり毎年行たり太嘗も其實は同 これを證とせり後世も一代一度の

太嘗の毎年改新嘗と云は 祭名の混小(き)故の制して 古へは太嘗と新嘗と通行

奠幣案上神三百四座 大社一百九十八 右中外日於此官齋院官人行事 諸司

とあるは後の制して内裏小故障ありて神祇官小行するより始り 細書

司不供奉は官にて行する例にて内 孝謙紀天平勝宝八年十一月丁卯廢新嘗會

裏不行更あり供奉の制を曉せり 以諒闇故也 檢神祇官記是年於神祇官曹司

是日當新嘗而為諒闇未終於神祇官行其事矣 あは猶内裏にて行更あ

由伎須政と云も此齋小

りて神祇官の事なり。或説り此新嘗も一代一度の例にて母年の事なり。云々
雲國造奏神賀詞と記せしは御即位の行支皆訖る後の事なり。勝宝八年延暦
九年まで小一代一度の大嘗延引くべき事なり。常例は國史に記されしと諒闇異例
の或る記せし事あり。猶下一代一度
或説は信か。大嘗の条。小云。後世は新嘗祭の官にて行ふ。神今食祭と同。官の廢れり。
此行支も絶行て僅に一代一度の
大嘗祭のみ残れり。事なり。

故に寅日といふ四時祭式に鎮御魂祭中寅日晡時中宮准此東宮巳日行

之と有り。巳日内裏の鎮魂大嘗二祭。此は神祇官祓院より祭れり。高皇魂神魂

生魂足魂玉留魂大宮賣御膳津神事代主等八柱の神の魂を鎮め祭る名

にて主上の諸神祇を祭り給ふ。此八柱を殊に祭り給ふあり。故に大嘗祭以前

小此祭あり。此八柱神を官に祭り給ふ。天武紀小十年五月己卯

祭百王祖御魂と見え祝詞式。鎮御魂。小自此十二月始来十二月。平久

御座所令御坐給。今年十二月某日齋。鎮奉止申。此齋戸祭は十二月の

り。四時祭式。月祭鎮魂祭神八座。留魂大宮女御膳魂辞代主。大直日神

坐。其儀於官齋院春稻敷以鹿宮炊以韓竈訖即盛。閻等納櫃居

案。官人以下。中寅日晡時五位已上及諸司官人參集宮内省。神部於堂上

催柏手御巫及猿女等依例儂訖。新儀式。鎮魂。大藏録以安藝木綿二

枚實於筥中進置。伯前御巫覆宇氣槽立其上。以杵撞槽。每一度畢。伯結

木綿訖諸舞訖次諸巫猿女舞訖と委。記せり。四時祭式祭物。小鈴二十口

十斤宇氣槽一隻見之大藏式。鎮魂祭於宮内省懸幔。結魂料木綿二

両預送神祇官祭日輔率属官須給。髪木綿所須安藝木綿二斤木綿二十斤

と見ゆ。御魂結の木綿は二両あり。江家次第。小次御巫。衝宇氣の条。小

衝宇氣神遊之儀也。以賢木衝槽上結。糸自一至十云と有り。鉾は賢木を用ひ

結糸自一至十は衝槽の數。御饌を奉り歌ひ舞ふ。此は固の岩屋戸の故事

を摸せし。三代實録。貞觀元年八月廿七日甲辰夜偷兒開

神祇官西院齋戸神殿盜取三所。齋戸衣並主上結御魂緒等と有り。此結糸は

神代に見え。結魂の糸は神代に見え。結魂の糸は神代に見え。

官不納むる事あり下 齊戸は神殿三所は主上、かく祭祀を殊より記せしむ

後、陰陽厭勝の説を辨へむとあり職員令神祇、鎮魂註小鎮安也人陽氣

曰魂魄運也言招離遊之運魂鎮身體之中府故曰鎮魂魂を陽といふは春秋左氏傳昭

公七年小人生始化曰魄既生魄陽曰魂魂は陽といふはは陽魂は運動を集解

人陰 氣曰魄唯舉魂為例則有魄可知故不言魂魄耳魄は人の陰氣

種は人身の理をいへり魂魄の二といふは、きまて漢理をいへは更不皇國の

祭名不似つゝ後世十一月己日は身祭りとて其身體を祭ると云

僧法藏優婆塞益田金鍾於美濃令煎白朮以賜純綿布十一月丙寅法

藏法師金鍾献白朮煎是日為天皇招魂之とあり圖經剝取朮去土浸水

更善今茅山所製朮招魂を美多麻布利志岐訓御魂を招復の義

此術を行ひと見ゆ仁徳紀小大鷦鷯尊大鷦鷯尊間大子堯以敬焉之從難波馳之到苑

道宮爰大子堯之經三日時大鷦鷯尊標標擗叫哭不知所如乃解髮跨屍以

三呼曰我弟皇子乃應時而活自起以居云且伏指而堯其術を記せり日

の後、此術をして、蘇生給ふ禮記禮記禮記篇天子復注不復者人死則

形神離故人持死者之衣并屋北面招呼死者之魂還復體其異其再生也故謂

之復也禮記篇注不復謂招魂也衣服小記注小復招魂以復魂也見ゆ

此復を多麻與波比と訓即ち多麻布利同仁徳紀異國の書に死者

を呼ひ活かむる事和名抄小靈日本紀云美多麻又用魂魄二字とあり

此註者は魂一字を取かくむつゝ陽魂の事といへは中く可物なるひ

又旧事紀神武の卷云般石余彦尊元年十一月庚寅麻志麻治命奉齋

瑞奉為帝后鎮祭御魂祈請壽祚其鎮魂之祭自此而始矣一本奉齋

瑞宝奉為帝后崇鎮御魂祈禱壽祚所謂御鎮魂祭自此而始凡厥

二あれと御魂の事詳かると神武紀上事記見えぬ傳三十一

天瑞謂宇摩志麻治命先考鏡速日尊自天受來天璫室十種是也所謂
瀛都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一足玉一死反玉一道反玉一蛇比禮一
蜂比禮一品物比禮一是也天神教導若有痛處者令茲十寶謂一二三四五
六七八九十而布瑠部由良由良止布瑠部如此為之者死人返生矣即是
布瑠之言本矣所謂御鎮魂祭是其緣矣其鎮魂祭日者猿女君等率百
歌女舉其言本而神樂歌舞尤是其緣者矣委トク此書は信みかき
事多かり又鎮魂祭の始トク云々
此十種神宝を布瑠部も死人返生とい
は招魂の似たり猿女等の歌舞も此傳
へは始り死人を返生するの似合き故して殊更作り設けたりと云はれ信みかき
神祇官祭儀八柱の御魂の神を鎮魂祭より外の説は用ひかき
祭鎮魂祭の鎮魂同く鎮魂和祭といふ即ち歌舞を奉るは神の御心を鎮
むること此卷の初云々如猶思ふ此祭の結糸の自一至十と云は舊事記の説
を考ふべし

季冬 月次祭 鎮火祭 道饗祭 前件諸祭 供神

調度及禮儀齋日皆依別式其祈年月次祭者百官

集神祇官中臣宣祝詞謂宣者布祝者贊辭也宣間百官故曰

宣祝 忌部班幣帛謂班猶頌其中臣忌部者當司及諸司中取用之

季冬は十二月あり 月次祭は四時祭六月祭十二月 月次祭云々あり 其儀は 准此 六月小同

鎮火道饗二祭は四時祭式十二月祭小見之既絶るあり 同式六月祭 小晦日大板 之後此二祭を載せし六月晦日小行是なり此後十二月節分の夜 難祭あり此は異國の制を皇國に傳へ來て鬼を逐ふ習俗なり 此事より疫神祭は

絶て道壇祭もなきや小ありむをはいつの御代も考へか本註小洪
臨時祭式小大衢祭宮城四隅疫神祭は見ゆれと常典にありあり
神調度の物祭物祭物礼儀齋日行更の礼式齋戒の日數あり皆別式小書小あり此式據て知

る一と本文の省略あり故に注加あり前件より十九度神祭の祭物調具
中、行更の礼容儀式是かは委小く今は其式も絶て傳小り
別式は廢帝紀天平宝字三年勅上封六月丙辰正位中納言石川朝臣年

足奏曰臣聞治官之本ハナニテ要據律令為政之宗則須格方今科條之禁雖著篇簡
別式之文未有制作乞作別式與律令並行ト同六年九月乙巳御史大夫正三

位石川朝臣年足傳小公卿各言意見仍上便宜作別式二十卷各以其政繫於
本司雖未施行頗有據用焉ト令律の遺漏を収め記古へは並行るレハレハ

本註も記さるレ猶衣服令獄令別式トハレ此書あり格式の書の制作あり
書見ハ本註トハレ今文制作の時撰者の本文を助け記せるレ也註者の説はあり

思ひ混ひテ義解板本ハモテ集解のハ寫シヤシカシトフセカハレ本註も註書も
此前提以下別式以上の十七字も本文ト同ク大字ト記シ混ラハレキ處多カルハ初卷下云ナリ

養老脩刊の後ト吉備朝臣真備等の差違を勘校の時もありむ此本註の
如シ其祈年月次祭の其は上文ト十九度祭トして其諸祭の中トてこ

云ル如シ或説テ其以下も本註ト疑ハレル也然らズ其云フ例令文ト此後あり百官集神祇官は百官の悉く参

集ハハレ百官の中トて毎同の官人トありキを廣クいハレハ大臣以下諸司の集ル故
難シ其諸司より二人の参集ナリ集解小百官は男官也主典以上毎司一人

許可參ト又云或一人舉司ト例ハ持統紀三年八月壬午百官會集於神
祇官而奉宣天神地祇之事四時祭式二月祈祭祭神祇官人率御巫等入自中門就

西廳坐東面北上大臣以下入自北門就北廳坐南面参議以上就廳東座西面大
夫就廳西坐東面群官入自南門就南廳坐北面既而神祇官人降就廳前坐

大臣以下及諸司共降就廳前坐中臣進就坐宣祝詞每一段訖祝部稱唯中臣
退大臣以下諸司拍手而段不稱然後皆還本坐領幣諸司退出儀准此百官の
行事見ゆ古し志を有らむ弘仁式大政六月十二月十一日月次祭奉班

幣帛大臣以下集神祇官如祈年祭とあり此例いと多し中臣宣祝詞は中
臣氏人の祝詞由中臣遠祖天兒屋命則以神祝祝之訓注し神祝祝之此云加武保佐

祝保佐天智紀九年三月壬午於山御井傍敷諸神座而班幣中臣金連宣祝詞
祝詞式大祝小大中臣天津祝詞大祝詞事云とありて其職掌あり註小

宣布祝者贊辭といは詳なるに布は敷く同くははも宣布の宣字脱
く告る按宣は宣旨宣命の宣と諸人讀み聞きたるあり宣字は遍祝者

贊辭て職員令神祇伯の註為祭主贊辭者也何り祝は即ち贊矣の辭なり按

集解記時行事宣參集之社々祝部等但依文宣百官可云耳は專ら

祝部等宣聞本本文百官參集何れ百官宣聞云へとあり

此集解の説を義解すりますへとあり忌部領幣帛は忌部氏人の執掌

也四時祭式忌部二人進夾案立史以官次唱御巫及社祝祝稱唯進忌部領幣

幣帛畢此祈年月次二祭領幣の例を記せし諸祭も准へ知る一

官の神部諸司官人の中其氏人を取り此職充は常員何れぬとふ

凡^{スメラミコトアマツヒツギシロシメス}天皇即位物惣祭天神地祇^謂即位之後仲冬乃^祭下條所謂大嘗者每

世一年國司^謂仲冬之月^謂自朔至晦^謂自致齋三日^謂自丑至

卯其辰日以後即為散齋故下^其大幣者三月之内

條云致齋前後兼為散齋也^謂大幣者供神幣物各有色目金麻楠金

令修理訖^謂柱奉伊勢大神宮楯戈奉住吉神之類

是也三月之内者唯據月言不以日計即始

自九月終十一月也修理者此言新造也

凡^是令文の凡例をいふ^{毎條凡字を}猶上^{後官職}員令^{小云へり}天皇即位は

天皇の御位小即き給ふ初をいへも此後不仲冬下卯日大嘗祭を行はる事

後^後御即位儀式^{惣祭天神地祇は諸國に祭はる天神地祇を悉く此時}

實錄小元慶元年九月廿五日癸亥於五畿七道諸國班幣境内天神地祇三千一百

三十二神縁^{陽成天皇御即位の大嘗}會供奉也^{會は九月小領幣あり}神名式^{五畿七道の諸國}

神祇大小社凡三千一百三十二座と後^其定額の見ゆ踐祚大嘗祭式凡踐祚

後十一月を三月と改めたり格有は此時不復舊制なり 此三月と改めたり格の初考は三月と九

月大幣を造り月踐祚大嘗式小凡散齋一月 十一月自晦盡晦と云 致齋三日

十一月五日より卯日大嘗の當日まで致齋なり 致齋の義は下云 辰日以下は不致齋ふ

る故り下條不致齋前後兼為散齋といへり 致齋は三日の間して四日辰日も散齋をせしむ 踐祚大

嘗式不致齋三日 自丑至卯 大政官式凡踐祚之初有大嘗祭十一月為散齋月内

致齋三箇日 自丑至卯 七日前造大嘗宮と云り 七日前は申其儀は大嘗祭式小凡十

一月中寅日 卯在朔日以前内外庶事整齊已畢卯日平明神祇官班幣帛

於諸神 謂祈奠幣 戌時天蹕始警臨迴立殿主殿寮供奉御湯即御祭

服入大嘗宮 云云 鷹悠紀御膳亥一尅進子時神祇官引内膳膳部等遷於

主基殿料理神御饌履儀還迴立殿供奉御湯訖易御服還御主基殿儀 其

一如辰日卯一點還迴立殿易御服還宮祭事已畢百官各退 二點神祇官中

等鎮祭大嘗宮四點神祇官准例祭仁壽殿云云 己日辰一點御悠紀帳三點薦御膳次奏和舞云

未二點御主基帳供奉御膳之後奏田舞云 云午日卯一點却西國之帳申三點供

奉解齋舞 記せり 此文長らく其要を取り云 寅日より己日までかく行事あれし 五日 致

齋は卯日よて畢るを見る 一 其大幣は神祇供奉の幣帛と尋常の

幣 云云 大幣と云はけり文武紀大宝元年十一月丙子始任造大幣

司以正五位下弥努王等為長官同二年二月庚戌是日為班大幣馳騁追諸

國國造等入京三月己卯天皇御新宮正殿齋戒惣領幣於畿内及七道

諸神七月癸酉在山背國乙訓郡火雷神每早祈雨類在徵驗宜入大幣

例と大幣の志と見ゆ 此文を考ふる文武天皇の踐祚大嘗祭以前小領幣の制あり 註小大幣者各有色

目金麻桶金線柱奉伊勢大神宮楯戈奉往吉神之類是也とある金麻桶金

線柱は水式金裝麻笥一口 徑深各四寸 金裝太多利一基 基方二寸柄長六寸廣五分厚二分

と有りて金色もて裝飾りしる具なり
此二具は機織の調度にて和名抄小登系部云絡埜和名多多理麻桶は麻を績ぎ

収る等楯戈は兵庫式小丸踐祚大嘗會新造神楯四枚
各長一丈二尺四寸本濶四尺四寸五分中濶

四尺七寸未開三尺九寸
厚二寸丹波國楯縫氏造 戟八竿
各長一丈八尺紀伊國忌部氏造 とあり楯縫忌部二氏の作

り進むは古儀の残れり人如此の類を大幣をいふ集解小伊勢大社者金

麻苧金多々利住吉中社者楯戈之類は大小社の三等小幣帛を奉り次

第あり見ゆ小社の制見えぬ尋常の幣帛して大幣なりぬ 兵器を神祇奉り奉り仁紀二十七年

八月己卯小弓矢及横刀納諸神之社蓋兵器祭神祇始興於是時と記す

三月之内は月よりいひ其日を計へ九月より始まり十一月小造は終る

あり三月は日數九十日文武紀大宝元年は十一月小大幣を造り始め明年三

月奉幣の事あり五箇月より新令下三月の制を立るときはゆ令修理訖

は新造り終りむをいふ修理を新造と註を加へは舊物を集解小新作日修

理といふも同一

凡散齋之内諸司理事如舊不得吊喪問病謂有重

者不在預コトヲ食実亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂コトヲ

祭之限コトヲ謂不作絲竹コトヲ不預穢惡之事コトヲ謂穢惡者不淨

歌舞之類也コトヲ致齋唯コトヲ祭事得行自餘悉断其致齋前後兼為散齋コトヲ

凡散齋之内は大嘗祭に限らば諸祭小散齋の日は所司官人皆此例

同一の制を立すコトヲ所司は神祇官の外をたいていひて預祭の

官人ありは諸社の祝部をたいて制をいひコトヲ諸司理事コトヲ

如舊とは散齋の中にも諸司の祭を預かる官人の齋務をたす事舊日の如く
散齋の日は政事も平日より異なるべく
疑は人の故に此文を記せしものなり
如舊は平日の如く

得置く
此文の理事も治事も同
唐令より高宗諱治といへる治字を避て
理字に改め記せば此令も彼令文を取りし處は皆然り心
吊喪問病は死喪の人を吊ひ病疾の家不到り其病を看問をいふ

喪葬令凡百官在職喪卒諸司分番會喪とありは吊喪あり
公使不遣はす臨時祭式凡吊喪問病及到山作所遣三七日法事者雖
身不穢而當日不可參入内裏
山作所は墳墓を營作の所なり三七日法事は死家まで佛齋を三七二十一日の間小設け冥福を収め踐祚大嘗式小齋月者預告諸司及下符畿内不得預佛齋清食
清食は法事の食
其在其身の穢にあらずんと喪穢を觸る同ければ吊喪に類せり
清食は穢を觸る法事なり
當日内裏を問病は看病あり
俗に介抱と云ふ如く其病も輕重あつたおまかせてかく云は

司陳牒を家を問ふ事あり
註り重親喪病不在預祭之限は兩親の死
喪患病は其子弟は此例なり
公式令凡百官人父母病患危篤者不得差充速使選叙令小縁親患假滿二百日解任とありを考ふ
父母喪患は此例なり
集解小假寧令小給假以上者皆退也其官人遭親喪者可祭預かす限あり
釋記のみ所禁只為百官官人耳
とありて祭預かす官人その後日給假ありは其人を闕へし故に別り處分あり
食は猪鹿の肉食

をいふ
宣書小食古之肉
垂仁紀八十七年
山獸訓注獸此志々
志々は獸肉
尼令小註云食食者廣包含生之肉也
合生と云は鳥獸
和名抄小鹿脯說文云脯乾肉也
和名保之見の保之は干肉をいひ
穢物の故に禁る人
聖武紀天平勝宝元年十一月巳酉
八幡大神託
宣白京の條
小石川朝臣年足等以為迎神使云所歷之國禁斷殺生其從人供給不用酒肉道路清掃不令汚穢
臨時祭式小其啖肉三日
此官尋常忌之但當祭時餘司皆忌

肉食を禁むるは佛教の慈悲

此官尋常忌之但當祭時餘司皆忌

合生不及ふを以て國家不制を立たりカミセウと云えて仁徳紀三十年小猪名縣

佐伯部献苞苴カミハテ天皇令膳夫以問其苞苴何物也對曰牡鹿也ハイカキモノト崇峻紀五

年有獻山猪ヒトヤマシラ天皇指猪詔曰シラテ見ゆれも進御も用ひしなり此後不

天武紀四年四月庚寅詔諸國曰オホミケ莫食牛馬犬猿鷄之實以外不在禁

例若有犯者罪之スラ此五畜の禁を始て立給へり此五畜を禁むるは佛經に見ゆ孝謙紀小

猪鹿之類永不得進御との格もあれと三代實錄元慶三年正月三日癸巳

僧正大和尚ト撰津國蟹足カサ胥骨は道陸奥國鹿脂莫以為贄奉御膳詔

從之鹿脂を此頃より進供奉りしはいふくき事なり古語拾遺小昔在神代大地主神營

田之日以牛實食田人干時御歲神子至於其田唾嚙神而還以狀告父御

歲神祭怒云云崇り給ふ神あれと四時祭云祈年祭云云御歲社加百馬白猪

白鷄各一生奉り古例なり馬は乘御れと肉食は穢けき物

猪鷄は御饌の料ときこえ疑はき傳ふる有る齋宮式あり實

され預祭の官人は古より嚴制さるること令文に見え如し

刑は罪を定め殺は殺戮なり不判刑殺は死囚の刑名を断定せぬる不決罰罪人ハ犯罪の人

を笞杖笞杖して決罰は穢け觸れ忌敬む獄令在京諸司云諸司

事登者犯徒以上送刑部省杖罪以下當司決スあり諸司官人決罰を

有別義といへ不作音樂は絲竹管絃歌舞の遊アソビをさすぬをいふ

瑟琴の類は絲笛葉篳篥の類は竹と云へをて音樂をきけも人心

管絃も同義なりと音樂と俗にアソビ記し礼記祭統篇不及其將齋也

の散けて其齋敬の心純一なりぬ故なり防其邪物訖其者欲耳不聽

樂故記曰齋者不敢散其志也集解不作音樂雅樂寮職掌不行

也臨時別作音樂者留トムといへ違へり祭預祭官人ハ音

は舊日の如トしと臨時ハ樂を作スはト違ハり此六色の林色ト全ク

唐の制度小據ハり唐禮樂志ハ元ノ豫ノ祀ノ官ハ散テ齋ノ理事如舊唯不吊

喪問病不作樂不判署刑殺文書不判罰不預穢

惡唯行祀

不預穢惡之事は雜々の穢事惡物觸れざるをいふ上文

色も穢惡の事多集解不惡謂佛法奸淫鬪傷也とり臨時祭式不凡觸穢

惡事應忌心者人死限廿日自葬日始計産七日六畜死五日産三日鶏非忌限

見畜畜不其家畜畜不鳥獸畜畜不凡改葬及四月以上傷胎並世日其三月以下傷胎

忌七日凡觸失火所者當神事時忌七日の禁忌を記し又云凡祈年加茂

月次神嘗等前後散齋之日僧尼及重服奪情從公之輩不得參入内

裏雖輕服人致齋並散齋之日不得參入自餘諸祭齋日皆同此例

あり皆穢惡不觸るを憚り制り神祇不淨を厭惡給へ在祭事不

預か官人不忌心避くへき官人此林示忌故犯せ在

決罰あり職制律不凡大祀在散齋而吊喪問病判署刑殺文書及決罰

食寔者答五十奏聞者杖七十致齋者加一等見之加一等は致齋を犯せ在其罪一等重きなり

諸社祝部及神戸の人は斐罰あり例ありも被具を課て罪を贖ふと古へよ

り見て桓武御代に其法を定めりれり之類聚三代格不延曆二十年五月

十四日官符云大被料物廿八種云右關總大嘗祭事及同祭齋月内吊喪

問疾判署刑殺文書決罰食寔預穢惡之事者宜科大被官人有犯

兼解見任上被料物廿六種云右關總新嘗祭鎮魂祭云齋日

吊喪問病等六色禁忌者宜科上被輸物如右あり中下二種の被も

准知る一此四等の被は其犯重き在輸物も多なり致齋唯祭事

得行は致齋の日は重く敬むへんも諸司理事も舊日の如くふは采く

罷て祭事の外は行ふ事を停むとる唯は祭事に限る散齋致齋の差別を考

ふ一散齋は散位散職の如く齋辰廿官司不結者を六色の禁忌を慎

ふ穢惡を厭むなり其餘の職掌は平日不異なり散を其齋を行ふなり

散を在る義を以て獄令の罪

人を繫かぬ散禁と致齋は齋のみを致し自餘の職掌は勤めに院

内齋居して外に出て専ら潔く齋戒を務むるをいふま散齋を行は

後致齋をミヨサヤ清身欠て神祇に近づく意をえたるへ天武紀二

已欲造待大未皇女于天照大神宮而令居泊瀬齋宮是先潔身稍近

神之所也とあり如く大學式釋奠儀云散齋三日致齋二日散齋皆於

於正寢致齋一日於本同一日於享所其無本司者齋を敬貌敬心のみふ

皆於享所もや神に近づく状あり致齋を俗に禁足といへり齋を敬貌敬心のみふ

うま言語動作ヒワサま々悉く敬しむ名目あり動作は穢悪の事を近づくは言語は

踐祚大嘗式其齋月者云其言語死称直病称息哭稱鹽垂打称撫血

称汗ト矣セヒラ困ツケル墓ツケル称壤と記せり穢事を皆裏表するて忌み避る詞なり此事

名目には皆唐の制りて其礼樂志不齋戒其別有三日散齋曰致齋曰清

齋と記せり清齋はいと清く齋戒する名目と云ふは皇國に此齋は用ひまされず致

齋の中より自然らある一礼記祭統篇君子之齋也專致其精明之德也故

散齋七日以定之致齋三日以齋之定之謂齋齋者精明之至也とあり定之は

敬慎の心の他か動かさ定まりて齋を行は全なり其心の徳精明なるをいへり散齋致齋の名是れ始なり

とは致齋の前日後日共り散齋をキ制をキ立りたると十一月は大祀

して一箇月の散齋なるは丑寅卯の三日は致祭其後晦日また散齋も兼

て前後に散齋ありし諸祭も准へ知るへ一説不兼は並の如く大嘗祭一事

の制あり或問けらく散致齋の日官人禁忌を犯し或は病假して其員

任せらるる事ありむさらには其闕を補ふ人足らざるへ此れと云ふ其齋人を擬

ふ其官人の員定制あれば外に擬齋の人を置るへ此れと云ふ其齋人を擬

ふは其事を撰行ふへ大學式釋奠儀云預享之官云云其享官已齋而

闕者通撰行事唐礼樂志豫祀之官云云其祀官已齋而闕者撰

見ゆ此制據るなり

凡一月齋為大祀謂上條云散齋一月即此條称齋
者皆散齋也唯於一日齋更無散
齋其致齋者皆
有散齋限内也三日齋為中祀一日齋為小祀

一月の齋とは朔日より晦日までの齋をいへも毎年の仲冬大嘗祭一代一度の大嘗祭をかく云へ上條云散齋一月ありとて此條齋と云は皆散齋を云

自餘の註は衣服令小礼服大嘗大祀元日則服之とて大祀は一代一度の大祀は脱

大嘗祭あり仲冬下郊の大嘗に代けて大祀といふ臨時の大祀あり四時祭式小凡大嘗祭為大祀と見

ゆるして大祀の例を知へ三日齋為中祀は三日散齋を中祀と云

祈年月次神衣祭の類あり神嘗祭も三代格延暦七年五月十四日官符小

科被大被右闕忌大嘗祭事云上被右闕忌新嘗祈年月次神衣等祭と

あり大嘗は大祀を以て大被を科せ新嘗以下四時祭式小祈年月次神嘗賀

茂等祭為中祀と有り三代格を考ふるに新嘗を中祀と云は仲冬の大嘗祭或

致齋して前後日を散齋をいへと上古は一月齋をすといふ明あるを三代格小新

嘗を中祀と云は神嘗の訛をいへ後には新嘗と一代一度の大嘗小に代けて大嘗は一月

齋新嘗は朔日より其日までの齋と定めり何の御代ありむ知りか禁

秘抄に十月中外日新嘗會自一日至其日辰日解齋神事様同神會食とあり

参の制を記して令條に異あり一日齋為小祀は當日のみ齋ありは小祀の制

あり三代格小大忌風神鎮花三枝鎮火相嘗道饗食等祭闕忌は科中祀

と見え大上中三等四時祭式も大忌風神鎮花三枝相嘗鎮魂鎮火道饗

等祭為小祀と記せり相嘗鎮魂二祭は仲冬齋月の中祭らるるを後

別り元記せり新嘗を一月齋とせし自朔日至中外日の制を立らるる

とき唐礼樂志小大祀散齋四日致齋三日中祀散齋三日致齋一日小

祀散齋二日致齋一日といへも七日為大祀四日為中祀

三日為小祀といへ六典第四祠部郎中の条も同状小見ゆ皆前後兼為散齋

の例あり註唯於一日齋更無散齋其致齋者皆有散齋限内と小

祀は其當日散齋致齋ありといへ一日の齋とて別り散齋はあく集解小

一日之齋有散齋哉答不可有耳朱曰一日之内可有散齋者未明一日之内

致齋且とありは深く考へるあり上文前後兼為散齋は諸祭に代るる

一日の齋^イとは自卯及酉七時あり申時^ウ祭事ありは六時^ロを故齋一時^ニを致齋と云へ^ハ無散齋^キの説は信か^ク 舊説は日を計へ散齋 四時^シ祭式^シ 大中細書小風

神奈以上並諸司齋之鎮火祭已下祭官齋之俣^ニ小祀祭官齋者内裏不齋其遺勅使之祭者齋之とあり 大祀は内裏に齋ありと中小祀は此例にあらずをいふ令條は預祭の官人の為不立つ

此は此例といふに異あり

九^ニ踐祚之日^ニ 謂天皇即位謂之 踐祚^ト祚位也^ニ 福也^ニ 中臣奏^ス天神壽詞^ヲ 謂以

神代之古事^ヲ為^シ 忌部上^ニ神璽之鏡^ト 劍^ト 謂璽信也猶云 萬壽之宝詞也^ニ 神明之徵信^ト 此

即以^テ鏡^ト 叙^ラ稱璽^ト

踐祚之日^ハ天皇の御位^ヲ即^キ給^ル日^ヲいふ書紀^{推古} 踐祚を安万津比津 政志^シ呂志^シ米須^ス 天津日繼 皇孫命は大御神の御言依のまふく天

下^ニ食國の政^ヲ照臨^シ給^ル 天上の故事 天皇の御位を天津日 繼知^ル食^ヲと申せり 此は古事記 踐^ハ履^ト 御位履み登る 漢籍の

皇帝^ト登^ル宝位^ト亦名^ニ踐祚^ト 集解 礼記文王世子篇曰成王幼不能位 祚^ハ周公相^ト踐祚^ト而治^リ注云^ニ踐履也^ト代^リ成王^ト履^キ祚^ト階^ト 王位治天下也といふ

事^ヲ引^キ 御座^トを孝德^ト紀^ル 升壇即祚 天武紀 設壇場 即帝位 壇 壇字は異國の王の土を築き壇を

座^ノ義^ヲ不^レ叶^ハ 借り用ひ上古は宮中の高き所をかくいへるなり 後^ハ其^ノ壇^ノ状^ヲ殊^ニ不^レ作^リ 高御座といへり内匠式云元正前 日^ノ官^人率^テ木^工長^上雜^工等^ヲ裝^飾大^極殿^ト高^御座^ト云^ニ蓋^作八角^角

別^上立^小鳳^像下^懸以^玉幡^毎面^懸鏡^三面^當頂^著大^鏡一^面蓋^上立^大鳳^像惣^鳳像^九隻^鏡廿^五面^慢臺^一十二^基 註^テ祚^位也^福 也^ト二^義小^云へ^るは 位也小は委からぬ 故^不福^也と重^ね云^り 福^位の意^トとける 國語賈

祚位也介雅注小允祭必受昨古へり宝位宝祚と連ねいへる福也は叶す

昨即福也とある小據すいへるも神代紀に宝祚を安ア万津比津岐マツヒツツキ周易に聖人の大宝を中臣に

奏天神壽詞は中臣氏遠祖天兒屋命の天神より受傳ふ勅語を以て壽詞と

申儀あり天神は天照大神高木神を申さふも此壽詞は台記大嘗祭の條に記せと後に作り設

定めりて記するは壽詞は天皇をホ保岐キまつる詞を祝詞式に大殿祭の

皇御孫之命乎天津高御座座天津ニ璽乃乃劍鏡乎捧持賜天言壽

宣志久と何り持統紀に天神壽詞を余古止よめり元正紀神賀吉詞に

も同訓ありては姓氏錄に右京神別に瑞齒別尊誕生淡路宮之時淡路瑞

井水奉ハ護御湯干時虎杖花飛入御湯分瓦色鳴宿祢稱天神壽詞に

奉號曰多治比瑞齒別尊と天神壽詞に其意志を比し虎杖花は多治

中臣氏人の奏は天武紀二年十二月丙戌侍奉大嘗中臣忌部及神宮人等云

賜祿といへる委し中臣に賜祿は奏壽持統紀四年正月戊寅朔神祇

伯中臣大嶋朝臣讀天神壽詞畢云皇后即天皇位と始て見ゆま

同五年十一月戊辰大嘗神祇伯中臣朝臣大嶋讀天神壽詞とあり天智

年正月庚子中臣金連宣神事踐祚大嘗式に辰日辰二點車駕臨豊樂院に

御彼心紀帳云六位已下参入立定神祇官中臣執賢木副笏入自南門就

版位跪奏天神壽詞忌部入奏神璽之鏡劍訖退立若有雨温とあり

註謂以神代古事為萬壽之室詞也は神代紀に皇孫尊の天照大神乃賜て

天津彦彦火瓊瓊杵尊八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物云因勅

皇孫曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也且爾皇孫就而

治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣と故事に中臣氏人は神

祝の辞を奉り代り奉り御即位の初に壽申す詞を是をもも萬壽

室詞といふは

いと唐 忌部上神璽之鏡劔は中臣官人壽詞畢して此鏡劔を忌部官人

捧進るをいふ持統紀四年正月戊寅朔 皇后即天皇 中臣大嶋朝臣讀天神

壽詞畢忌部宿祢色知奉上神璽劔鏡於皇后と有り 踐祚大嘗の儀神璽之

の字にいふる状なきに似たり神璽は天皇御表物の義あり 八坂瓊曲玉をいふる

或加へざる 即ち璽は信より神明徵信の義ありを鏡劔二種を璽と稱ふ

祝詞式 大殿祭 小天津璽 乃劔鏡 捧持賜天 踐祚大嘗式 忌部入奏神

璽之鏡劔と記せり即ち所謂八咫鏡草薙劔より 古語拾遺小至干磯城瑞

安故更令齋部氏率石凝姥神齋天目一箇神齋二氏更鑄鏡造劔以

為護身御璽是今踐祚之日所獻神璽之鏡劔也と見ゆれども令文に劔鏡

と云は後より鑄造り 宝器より禁秘抄小賢所条小自神代神鏡如神官奉

仰為伊勢御代官被留也と記し神代より傳たり 八咫鏡草薙劔は伊勢

小尾張の祭り奉り 神璽の義は公式令より天子神璽註小謂踐祚之日壽

璽宝而不用と有り 後官職員令藏司尚藏職掌神璽関契と有りは此女司

の掌事事なり 禁秘抄小白河院御宇仰昌侍所神

鏡飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留 依此緣女官奉守護と此時より女官の掌事と序疑ふ

凡大嘗者每世一年國司行事以外毎年所司行事

大嘗祭は仲冬七卯の祭名あり後例年を新嘗と云每世一度を大嘗と云

其祭儀は同一故に令条を共み大嘗といへり 此義は仲冬大 嘗の祭りし云

皇の御世別唯一年此行支あり 例年の大嘗祭 國司行事は御田稻

のト食る國の國司より 申て調進る制をいふ御田ト食の稻を神饌と醸し始は

神代紀皇孫の御兒 小吾田鹿葦津姫以下定田號曰狭名田以其田稻釀天甜

酒嘗之とあり 此後は御代く小記 天武紀五年九月丙戌神官奏曰為新嘗

ト國郡也齋忌 此云 則尾張國山田郡次 此云 須岐丹波國訶沙郡並食ト同六

年十一月己卯新嘗乙酉侍奉新嘗神官及國司等賜祿とあり 持統紀五

年十月戊辰大嘗丁酉侍奉播磨國因幡國郡司以下賜絹等各有差文

武紀二年十一月巳卯大嘗賜供捧尾張美濃二郡司百姓等物各有差と記

天武御代より制度を定め給ふる事
播磨因幡尾張 仁徳清寧用明 美濃と下定の國司

皇極の紀を見れば此時より始りしは下り
全文は仲冬大嘗の条より 三代

實錄元慶元年十一月戊戌豫禁凶事凡天皇受讓踐祚七月以前即位者嘗

年行夏八月以後者明年行夏散齋一月致祭三日祭月之内豫忌凶惡之

事自餘事依式准擬と制を立たり
踐祚大嘗云凡踐祚大嘗七月

以前即位者當年行夏八月以後者明年行夏此據受讓即位非謂諒闇

登極也と見えて諒闇の年は此制あり
天武紀元年は壬申の乱を以て二年卜定 ありて六年より新嘗持統紀は四年御即

位して五年より大嘗文武紀は讓位の
踐祚を以て同二年より行夏と云ふ國司行事は踐祚大嘗式より其年預令所

司卜定悠紀主基國郡奏可訖即下知依例准擬又定檢校行事
檢校は國 司の行夏を

檢校
をいへり凡在京齋場者預令設而處悠紀在左主基在右云其齋場者

分為内外兩院以柴為籬編木為門
内院所造は九宇より八神殿稻實 屋黒酒屋白酒屋倉代屋敷殿

白屋大炊屋麴屋各一宇外院所造も五宇より多米酒屋倉代屋供

御料理屋多米料理屋麴室各一宇皆以黒木及草構蓋以草干為部裏以

長薦酒屋麴室席為承塵曝布為裏其井二處下訖二院營造既訖

収御稻於稻實屋但御飯稻造棚別置す御井者造酒見始堀といへり國

司各此内外院の九宇を營造の故に兼日行夏所の檢校あり八神殿は

祭神の殿にて八柱の御祭坐を設くへ多米都稻は甘美の物子にそへり

凡造大嘗宮者前祭七日云鎮祭其地其宮東西二十一丈四尺南北十

五丈中分東為悠紀西為主基院凡大嘗宮南北門所建神楯四枚戟

八竿を見ゆ乘輿出入の
門より故よりさて十一月中寅日巳尅兩國供物祭自齋場向

大嘗宮悠紀在左行主基在右行云到大嘗宮南門外即悠紀左廻主

基右廻共到北門入成尅天蹕始敬言臨廻立殿入大嘗宮御悠紀嘗殿

云彼悠紀國司引歌人入自同門
此同門は朝堂 院東掖門より 就位奏國風云佐伯氏の古詞の奏集 云人歌舞安倍氏侍

宿申の訖薦悠紀御膳亥一尅進薦亨既訖子時宸儀還廻立殿供奉御湯訖

易御服遷御主基嘗殿其儀一寅一尅薦主基御膳訖辰日卯一點還廻立

殿易御服還宮敬躡祭事已畢百官各退同四點悠紀主基兩國倉代等雜

物列立於豐樂院庭中二國各設御帳於殿上悠紀在東辰二點車駕臨豐

樂院御悠紀帳已一點悠紀國薦御膳給饗五位已上如宴會兩國多明物並

令辨官班給諸司次國司引歌人入奏國風國風是其國の風俗舞の事訖撤朝膳未二點

遷御主基帳並同巳日辰二點御悠紀帳三點薦御膳並同未二點御主基帳

供御膳之後如前午日卯一點却兩國帳云悠紀主基兩國主典以下諸郡司

主帳以上把笏者別勅叙位者依臨時處分委々見其文いと長はれは

大嘗宮悠紀主基嘗殿は朝堂院内不營造せり國司齋場は北野不ある

下条九北野齋場雜舍事畢壞却あり今の世は内裏小て古の跡のまふく一代

一度此行事ありといふ悠紀は天武紀小齋已此云主基は次此云此義より

齋已は齋居て忌敬むをいふ主基は清く物を作して云る大嘗の神酒

は已にふ敬む義を名を負り今俗も物をいとく清むるに御食を作れ

由須岐須須岐といふ詞あり此齋忌次のことより出さるらん以外所司行

事は一世一年の以外は毎年祭祀小預から諸司官人の祭事を行ふ制を不

所司は神祇官を専らいへとて一世一年の大嘗も常典の大嘗も同儀不

其祭不預から諸司をいへとて一世一年の大嘗も常典の大嘗も同儀不

依國司と所司の行事は異なり衣服令り大嘗大祀已けて云へ大嘗との

常典の大嘗不日此へる上文九天神地祇者神祇官皆依常典祭之とあり

併せ考ふへ

齋日平且頒告諸司

凡祭祀所司預申官謂所司者神祇官也預申官者一日齋亦須預申之官散

祭祀所司は神祇官より上文の所司行吏といへり異を註を加へり 預申官

は兼日より大政官に祭祀散齋の事を申すをいへり一日の齋に申すを諸司官人

の禁忌を憚る故ふり 申は解状をも 大政官式に九祭祀日所司預申官前散齋一

日少納言奏聞し 踐祚大嘗式に齋月者預告諸司及下符 官散齋日

平且預告諸司は大政官に散齋の其日寅尅諸司祭預かす所司毎司分

て當日より散齋を告るふり 此文官より直小諸司を告る如く見ゆれり

宣復省舉申輔命云召所管司而宣之錄稱唯命史生喚省掌省掌稱唯

就版位丞命召大學寮省掌稱唯復座令召之寮屬就版位丞命如辨官

宣寮屬稱唯退告本局餘祭准此といへり 官八省を召て弁官の宣示あり省即

唐大典祠部郎中条に諸大祀齋官皆於散齋日平門集尚書省受誓 集解

小弘仁二年二月六日官符云仰改齋日事右據令條允祭祀所司預申官官散

齋日平且預告諸司其散齋之内不得吊喪問疾食寔不判刑殺不決罰

罪人不作音樂不預穢惡之事今被右大臣宣稱奉勅散齋之日預告諸司

自今以後永為恒例とあり 此格文日本後紀弘仁 二年二月辛未の制と云 此格に仰改齋日と云れり

令條に異なりぬ後預告諸司の急を緩む事より 此制を立れり

ものるに 職制律に大祀不預申期及不領所司者 平且を寅尅に

定むは天武紀七年取平且時敬蹕とあり平且を止良乃止伎と訓あり

允供祭祀幣帛飲食及菓實之屬所司長官親自檢

校必令精細勿使雜穢

供祭祀は神祭不供奉雜物といふ 幣帛飲食は絹帛布絲の類荒妙和妙
す、神稻神酒薦亨の物をとらへて和名抄幣帛和名美天久良とあり

菓實之屬は祭薦の物して和名抄木實曰菓草實曰蒨とあり 日本私記

云菓古之美俗云久大毛乃蒨和名久佐久太毛乃てよあり 所司長官は
梨子桃子苺子柿木菓ふり 麩の類は草實と云へきあり

預祭諸司の長官を廣く云へり 神祇伯のみふありは悠紀主基の国司長官
官まてしめて所司と廣く考ふべきあり

聖武紀天平元年八月詔曰云諸國天神地祇者宜令長官致祭とあり 四時
祭式

小祈年祭云云右国司長官以下准例散齋三日致齋 親自檢校必令精細

勿使雜穢は長官の身親り廻り見て檢校せし 他官不委任せて其身精細
の怠り禁免し制を精細

祭物を精明く巨細く檢校して種々の穢惡小觸れせらむる制をいふ 其穢惡
の事種

々あれは一物の名あり故に雜穢と云へり 上文小穢惡註云穢惡者不
上を檢校といふ下精細と通ずいへる考ふべし

淨之物鬼神所惡也と云り文武紀大宝二年秋七月癸酉詔曰伊勢大神宮封

物是神御之物准供神事勿令濫穢 濫は言
取武紀神龜二年七月戊戌詔七道

諸國神祇社内多有穢死及放雜畜敬神之礼豈如是乎宜國司長官自執

幣帛致清掃常為歲事といふ也見抄

凡常祀之外須向諸社供幣帛者皆取五位以上卜

食者充謂凡卜者必先墨書龜然後 唯伊勢神宮常

祀亦同

常祀之外は 板本小常禮之外は誤りなり
祀を祀と誤字なりせしものなり 令條不載十九度祭以外を

かくいへるなり 常祀は常典 臨時の祭をいふ臨時祭式小凡常祀之外應祭者
と云り如

隨事祭之非辨官處分不得輒預常祭とあり 須向諸社供幣帛者下は

勅使を諸社に遣て幣帛を供奉し使者の制を以て諸社は諸國より京

中いれり有へり 四時祭式に賀茂春日と諸社に 皆取五位以上ト食者は

其幣帛使は五位以上四位以下の官人神祇官ト部の龜トテ吉兆の人を用ふ

あり 不淨の人疑ひあれば 職員令神祇ト兆註ト者灼龜也兆者灼龜

縦横之文也凡灼龜ト吉凶者是ト部之執業といへり 註ト凡ト者云云

は尚書洛誥惟洛食孔安國註ト必先墨畫龜然後灼之兆順食墨ト

を全く取たり 其龜甲を灼く以前ト墨を以て兆形を畫キ 幣使をト定の

たるは崇神紀ト使物部連祖伊香色雄為神班物者言之又ト便祭他

神不吉ト古事記垂仁ト小宗出雲大神之御心故其子令拜其大神宮

將遣之時令訓誰人者吉令曙立王食ト故科曙立王令宇氣比白因

因拜此大神云云ト此ト食の始なりト 御使の王臣等をト定て清潔の

敬む古制 唯伊勢大神宮常祀亦同の唯は特ト云ト如ト諸社の例は殊

なる義を以てせり 法曹至要抄ト伊勢 常祀の外も五位以上ト食の官人を使

小充るをト六位以下の卑位官 人を使ト充る制あり 常祀は令條の祈年神衣月次神嘗四祭は伊勢

大神宮の祭ト幣使祭造も同制を以て 此文よりト諸社常典の幣使はト食

唯伊勢の幣使のみ常祀臨時 聖武紀天平二年壬六月甲午制奉伊勢大

神宮者ト食五位以上充使不須六位以下 三代格ト神龜五年三月廿八日

格云外五位縁神祇官事雖有ト食者不合差抗伊勢神宮奉幣帛使中

臣忌部不在此限ト外五位も幣使は用ひらるト 外五位は内位なりト 中臣

忌部は孝謙紀天平宝字二年八月庚子朔詔ト其中臣忌部元預神宮常祀

不闕供奉久年トありて上古も幣使と共に供奉の例あり 四時祭式ト九月伊

勢大神宮神嘗祭云其使諸王五位以上及神祇官中臣忌部官各一人給當色執幣五人使從者三人各給潔衣布一端見ゆ今は幣使王代五位官人參入あ

凡六月十二月晦日大被謂被者解東西文部謂東除不祥也漢文

直西漢上被刀讀被除訖百官男女聚集被所中臣宣

被詞卜部為解除

六月十二月晦日は夏冬二季晦日按内裏中宮東宮は毎月晦日御麻御贖あり事四時祭式見えて百官以下は此被除の制見えされは半年毎約して二季晦日小官人の被除あり月次祭を二季行更り同大被は令條の如く百官男女の群聚の故にいふ俗に大勢の男女此處たて被る官人の過ち犯け七種多ク罪事を當日

被は清めて神祇朝廷赤き清き心を供奉給ふ御制あり政を食國の神事を供給ふ同く故に官人の身の不浄キタキを除き去る被と云左氏傳杜諸司の理務も此意もへり除去之云不祥を吉凶の凶小被ナレ預注小被ハ彼國の事異註の不祥は不浄の意あり皇制小叶ハ大被の始は神功紀小皇后傷天皇不從神教而早崩云是以余群臣及百寮以解罪改過書紀の文は古事記同更取國之大奴佐而種々求生剝逆剝阿離溝埋屎戸上通下通婚馬婚牛婚鷄婚大婚之罪類為國之大被と記生剝以下大婚以上十一種即天武紀七年是歲春將祠天神地祇而天下悉被禊之文武紀大宅二年三月己卯鎮大安殿大被天皇御新宮正殿齋戒物領幣帛於畿内及七道ありは神祇を祭り給ふ大被百寮の罪各を解除あり是は臨時の大被なり神嘗祭の外年中二季晦日官人の罪事を被制と云凡つものふ内裏中宮東宮二季被は毎月晦日別御贖天武紀十年六

月丁酉晦令天下悉大解除文武紀大宝二年十二月甲戌大上天白皇崩壬戌晦
廢大被と二季被見えん此時始れり其被所は朱雀門外と

見神祭の大被は建礼門前にて行なはれり大政官式小凡六月十二月晦日於宮城南路大被大臣以

下五位已上就朱雀門若雨泥日仰所司設橋於門東掖辨史各一人率中務式部兵部等省

中見参人數大政官人數亦百官男女悉會被臨時大被亦同式部式小六月十二

月晦日大被其日所司陳列被物有常儀百官男女會朱雀門外記史中

務式部兵部並座東伏舍彈正坐西伏舍大臣以下五位以上坐壇上東舍方南階

東一間為四位已下階三間為參議以上階但雨泥之日仰所司設四方隔以班慢

橋於東方壇上女官亦就同壇上とあり門下の壇階小着坐とるふり

三省省掌各置版位諸司就版進番以上見参簿と云り番上は散位の名簿を

官人見参六位已下の坐不き在座下列立する掃部式小六月晦日大被朱雀門

並女官座右伏舍六位已上座但祝詞者在座中十二月亦同と記せり中務式小凡六月十二月晦日大被輔丞録共集

被所申女官數此女官の事考ふ小元正紀養老五年七月巳酉始令文武百

官率妻女姉妹會於六月十二月晦大被之處記せば此御代より始りて養老令小

其格文を加へれり祝詞式大被小天白朝廷任奉留比礼挂伴男手握挂

伴男數員伴男劍佩伴男能八十伴男始長官官任奉留人等と

諸司文武男官の事は見えん女官の事は記さる考ふ或説不比礼挂男は女官の事

と云は信か大膳職内膳司の膳部は比礼挂伴男又云此祝詞大被

預令掃除其處亦兵士禁入往還元日質明掃除荷靈は被所

小立置く草人形あり四時祭式被具は記さる又同式凡踐祚大嘗大

被云云官人率防令坊長姓於羅城門外東西相對分列左京西面北上右京東面

北上朝使者坐中央南向詔即解除東西文部は宮城の東西小住宅の

曰東西也古説小東を耶麻止西を文部は東漢直西漢文直左京なり集解加布知訓信か

東文直西文直是謂文部見此二氏を漢と云は姓氏錄諸蕃小文宿祢出漢

高皇帝之後高王也文忌寸文宿祢同祖宇尔古首ウニコオヒト之後也云比皆漢

帝の後應神紀年小倭漢直祖阿知使主アチノヲミ見同紀小阿直岐史之始祖也

賜姓曰連天武紀十四年六月甲午倭漢連河内漢連書連賜姓曰

忌寸應神紀不王仁者是書首大宝の時は忌寸の姓なり桓武紀小

延曆十年四月戊戌左大史正六位上文忌寸最弟等言文忌寸等元有二家

東文稱直西文號首相比行事其來遠焉今東文舉家既登宿祢西文漏

恩猶沈忌寸漢高帝之後曰鸞鸞之後王狗轉至百濟久素王時聖朝

遣使徵召文人久素王即以狗孫王仁貢焉是亦武生等之祖也於是最弟等

八人賜姓曰宿祢見之りかれ註小文忌寸と記す云古制なり

猶學令東西史部の條云へ上被刀は罪事或清く切り断つ義を取らるへ古事記傳都牟

前大刀の注小俗須加利止斬断と云、如大刀斬断意何と云二氏の上はゆへ有ける人未思得る

文武紀大宝二年十二月甲寅太上天皇册壬戌廢大被但東西文部解除如常

とあるを按ふいと重き制と云諒闇をして大被停め東西云は二氏

相比物行事おもて集解小東先參西後參一時共参入一文部進

即行事先東文部入被詞訖退出西文部参入と記す聖武紀神龜三年十二

月壬申大政官處分東文忌寸等自今以後令任辨官人上大被刀と制を立

ら作は以前此氏人の任不仕の差別る取充る人と辨官不任る氏

人も少ふべれ三代格延曆六年六月卅日右大臣宣奉勅小東文忌寸

等自今以後令任諸司主典以上者上之と制を改め臨時祭式小凡東西

文部等上大被大刀者取諸司主典已上者と記す此刀は集解小東西文部

二人各以刀一口參入御所捧刀各讀申被詞即刀所給也東文部刀者作造兵

司少善之西文部刀者作鍛冶司少惡之見地四時祭式小金裝橫刀二口東

文部木工式刀金裝大刀一口長二尺三寸廣一寸五分料鐵四斤金薄六枚

所預木工式刀被刀と記すといへり同金裝るべし集解小所上刀所司申官

といへり記せし其刀の尺寸も此尺寸にて知るべきなり

令備臨時祭式小二季大被等料物者五日備供之五日の上小前字腹ちて

のふりて詳りふりて此故事を説くは漢は劉氏其字印金刀の利

此時の被具は四時祭式六月晦小五色薄絶各二緋帛一丈絹二金裝橫刀

口金銀塗人像各二枚已上東西文部所預と記せし讀被詞は集解小東文

參入上刀讀被詞退出訖後西文參入也或云東西相並讀訖とあり其被

詞は祝詞式六月晦小東文忌守部獻橫刀時兒西文部謹請皇天上帝三極

大君日月星辰八方諸神司命司籍左東王父右西王母五方五帝四時四季

捧以祿人請除禍災捧以金刀請延帝祿兒曰東至扶桑西至虞淵南至炎

光北至弱水千城百國精治萬歲萬歲とあり漢文の風して白玉風小

似つげからば萬歳を重ぬいへり祝詞あり神明小請申在中三極は大

極は無極とし大乙極といへり北極は北辰天の中居て衆星を環せり天の樞

と云南極は史記天官書小狼比地有大星曰南極老人注小比地近地也正義曰

南極為人主占壽命延長之應と記せり此南極星は皇國を見えり琉球人云

老人星は三星して夏至の時望み見るといへり或説り天極星あり同天官書小中宮

曰天極又宸位曰宸極といへり此星は易の大極ありといへり此説も然るべき皇

天上帝と天を崇めいへり三極大君と要星をいへりあらむ司命は星名文昌宮第

四星也人の壽命を司り星より司籍は司籍の誤りて祿福を司り星より唐礼樂

志小祀祭云司命司人司祿は靈星を祀ると云て西王母は漢武故事小見えて人の

知れり仙神ふれり東王父も有へり此父母を上帝の子と云傳へり五方の五帝

は唐礼樂志の東方青帝靈威仰南方赤帝赤熛怒中央黃帝含樞紐西方白帝

漢人の後をたれも其本居の漢地四境の極を兎不唱ふる（一）もどし漢音ふり
考ふるに陰陽式難祭文の四方之堺東方陸奥西方遠直嘉南方土佐南方佐渡
と利乎知能所乎祭年多知疫鬼之住加登定賜と有り同漢文漢義ふら皇風
似つるべし
考（合）下は東西文部の古詞をして奏するふる（一）傳へしものありむ
此文詞も漢地より

百官男女聚集被所は百官の男官女官の朱雀門外を參聚列立の制あり
朱雀門は宮城の南門にて女官の参集は上晦日大被小云々如文武百官の妻女姉妹
其大路

も参集の制あり三月式六月大被の条百官男女會集朱雀門外と記せり中臣
宣被詞は中臣官人六月大被詞を讀て諸官人へ宣示せし中央へ進讀るる

へ其詞も大中臣天津金木乎本打切末断スエキリテと有り此文長りれも省きし
被詞と云月祝詞式小祝詞諸祭中臣氏祝詞と古より祝詞は中臣氏の執業より
此故あり

下部為解除は下部官人罪を解キズキ穢を除く行夏を解除といへし神功
紀下解罪改過云為國大被と有り此義を取れるふむ被清と解除と同義ふ
ら其状は異ふり

四時祭式六月晦日大被右晦日申時以前親王以下百官會集朱雀門下部讀祝詞と有り
るは後の制より解除の執業は四時祭式晦日御贖条小中臣率下部云云中臣捧御麻

一人令向被所云云許皆退出臨河解除去と有り此時は中臣官人下部を率ひ参
入せし其下部下被詞を讀の中臣は御麻を進上り荒世和世を奉を職して古法
を異ふるあり

本書を考ふへ下部ある事大被詞は今年六月晦日夕日之降大被尔被給比
清給事乎諸間食止宣四毛國下部等大河道持退出却被止宣と

ありて下部は川邊へ持出解除せり四毛國下部仕毛字誤れり後のよか
と四國と計へしと四方四時祭式毎月晦日御贖小臨河解除と云も下部あり

凡諸國須大被者每郡出刀一口皮一張鋏一口及

雜物等戸別麻一條其國造出馬一疋

諸國須大被は諸國にて行ふ大被の用物といへり此大被は国司廳門外にて行ひ
其儀は朱雀門外不同し諸國の儀は物不見及て
やれと在京と同法をむ 古事

記仲夜の段更取國之大奴佐而云為國大被と見え天武紀十年六月丁酉晦令
天下悉大解除とあり臨時大被は天武紀朱鳥元年七月癸
丑詔諸國大解除文武紀二年十一月癸亥

遣使諸國大被慶雲四年正月乙亥因諸國疫遣使大被孝謙紀天平宝字
二年八月乙卯遣使大被天下諸國欲行大嘗故也二季被の外あり京職
式を考ふる下九踐祚大嘗大被小官人率坊令坊長百姓於羅城門外東西
相對分列左京西面北上右京東面北上朝使者坐中央南向訖解除とあり官
使を諸國遣はし大被をむる状は似しとあり集解小諸國大被者天皇
即位惣祭天神地祇必須天下大被以外臨時在耳と記し二季大被は諸國
有き今は定め云其用物は天武紀十年六月
解除条不當此時國造等

各出被柱奴婢一口而解除天武紀五年八月辛亥朔詔曰四方為大解除用
物則國別國造輸被柱馬一疋布一常ソレホカ以外郡司各刀一口刀子一鎌一口
矢一具箱一束且每戸麻一條と見り此制度を取て今條に載るなりとあり

每郡出刀云云々郡司より刀皮鐵の三種あり雜物を輸を制をいふ皮は集解
鹿皮と見り雜物は布鎌矢箱鐵あり一々大被詞天津金木天津菅曾燒

鎌乃敏鎌トカマと見え整は地を平ナラを具皮は鋪設の用布は幣稻は被物な
らむ鎌は被處の茅草
を芥る料又祭物ありをて用物七種あり後々増加して四時祭式六月
大被

庸布木綿麻糸烏装横刀篋鐵鹿角鹿米酒稻アヒヒカツラキヤヒモ鰻堅魚腊海藻
鹽水盆ヒヤコカシハ袍檮馬祝詞料庸布短帖ハの廿四種を記せ東西文部所 戸別

麻一條は文武紀コト每戸麻一條とあり此は民戸別コト一條ついで出さるめ
每人を引き清むる大麻の料一條は少許の麻あり伊勢物語
の哥に大麻の引手ありと詠ふ如
く多くの人を振り清
むる故に引はれし 國造アタカは古アタカ其國縣をアタカてきて國の守の如く執イキマヒ

ひ強く其國のみを治て朝廷ツカサに職掌ツカサふく世々不職カサを襲ぬクニノミヤ乃美夜
都古ツコ訓コ成務紀五年秋九月令諸國以國郡ニ造長縣邑ニ置稻置並

○七十六

賜楯矛以為表と始て見えたり古事記同御代の段に定大國小國之國造亦定國々之堺及大縣小懸之縣主と記す
賜楯矛は國を治むる表物なり神代下大國主神の八尋矛を皇孫命に賜ふ故事なり 國造縣主稻

置之三等ありて元恭紀に鬪鷄國造賤為稻置ふ事見ゆいと皆國造と

云へ五百一十年をかりを経て孝德紀大化二年正月甲子朔即宣改新之詔曰

其一曰罷昔在天皇等所立子代之民云國造村首所有部曲之民其二曰初脩

京師置畿内國司郡司と始て國造の郡國を取むる制を罷て每郡國小國守

を始て置たり國守國造の職は古くは國造は神祭りの執業とあり其權勢を

失ひしをもたせしむる古名残りありて其國の大姓あり猶選叙令文武紀大宝二

年二月庚戌是日為班大幣馳驅追諸國國造等入京三月己卯鎮大安殿大被天

皇御新宮正殿齋戒物頒幣帛於畿内及七道とあり此大幣を諸國神社小進ら

むとて國造を追上り同年四月庚戌詔定諸國國造之氏其名具國造記と國造の

定額を記す其書は世に傳はりて舊事記國造本紀に百二十餘國造の

やあむとあり此中下後葛城凡河内山代伊勢素智紀伊宇佐等の八國造

を開化天皇御代と三野前國久比岐吉備縣守と宗神の御代科野石見出雲神

野波久岐深江知知夫阿蘇火波多の十國を景行の御時小桓武紀十七年三月

己酉格小昔者國造郡領職員有別各守其任不敢違越慶雲三年以來令國造

帶郡領寄言神吏動廢公務雖則有關急而不加刑罰乃有私門日益不利公

家民之父母還為巨蠹自今以後宜改舊例國造郡領分職任之と見ゆなり

國造の郡領小任せたり付慶雲年中小始めに此時より罷たりは國造の

舊家もや衰微へゆけりやあむ弘仁の新撰姓氏錄小國造縣主の名僅

小記せり國造郡領の分職は郡司は郡中の雜務國造は國中の神祭りを執職

意補充也より集解小國造者一國之内長造任於國司郡別給國造田所以任

郡別任大少領より古昔無國司而只有國造治一國之中出馬一疋は其國の

國造の家より被馬を出し制をいふ大被詞小目振立聞物止馬率立ヒキクテ氏

緣ヨシ所ハ御馬ハひき立つるも文武紀五年大解除の条小国別國造輸ハ被柱馬一疋と見え弘仁式ハ長部ハ諸國大被馬若無國造者以正稅買用其價ハ不得過五十束ハ民部式ハ凡諸國大被ハ但大宰府及肥前肥後日向三國並以牧馬充ハ國造氏の後世は絶て被馬を輸ハ此制を立ハ後諸國國造の悉く絶ハ國造の郡領ハ拜せし日のハ制は集解小國造任郡司者刀等並通備耳兼出馬也ハ然ハ

凡神戶調庸及田租者並充造神宮及供神調度其

稅者一准義倉謂租稅者並是曰賦唯新輸曰租經貯曰稅也一准義倉者不出舉也

皆國司檢校申送所司

神戶は神祇の社奉らる封戸より此民戸より輸を租調庸賦を供神の用度ハ充らる制をいふ東宮雜用田中宮湯沐田崇神紀七年小祭八十萬神仍定ハ天社国社及神地神戶と始て見ゆれ此御代より制を立ハ此後持統紀四年正月班幣於畿内天神地祇及增神戶田地元正紀養老七年五月癸卯制神戶當造籍帳戸无増減依本為定若有増益即減之死損即加之聖武紀天平元年十一月癸巳大政官奏寺家神家地者不須改易便給本地と戸口増減なく本地不改の制嚴重ハ民部式ハも神寺等田ハ各據本地不須輒改ハ調庸は神戶より輸に調物庸布より神御の物より安ハ用ハ文武紀大室三年七月癸酉詔曰伊勢大神宮封物者是神御之物宜准供神支勿令濫穢聖武紀

天平二年七月癸亥詔曰供給齋官年料自今以後皆用官物不得依舊充
用神戸庸調等物上の制見えり自餘神物も同かへ集解小調庸置神
祇官中間給神主等臨時量所用多少給充とあるは供用の餘物を衣料小
給おさるへ
神田租も神主領ち給は天武紀六年五月己丑勅天社
地社神稅者三分之一為擬供神二分給神主の制あり
調庸も准
田租は神田神戸り輸も租稻あり
即ち神一戸も輸は租稻は田令云へ三代格小貞觀二年十一月九日符
田あり
云去延曆二十年七月壬戌格云檢案内大政官四月十四日符云自今以後神戸
限以二町田租定十五束者丁減少供祭應之宜天下諸社同共弛張丁並租
數一依舊例とあり舊例は
並充造神宮は田租調庸並其神宮の
造營修理の料充るる類聚國史嵯峨天皇大同四年九月辛卯勅修造諸
國神社之狀云自今以後所在長官專當其事勤致修理其料度者以神稅

充無封之社宜用正稅とあり
所在長官は其國司や云無封の社は神戸の封なき神社なり臨時祭式凡諸
國神社隨破修理但攝津國住吉下總國香取常陸國鹿嶋等神社正殿
廿年一度改造其料使用神稅如無神稅即充正稅見ゆ
此三社は神戸を奉らざる制も神稅あり
如無神稅は其修理の役夫も戸人を用ざる制も類聚國史弘仁二年九月甲
寅大政官符云應令神戸百姓修理神社事右奉勅諸國神戸例多課丁供神
之外不赴公役宜役其身修理神社隨破且修莫致大損國司每年巡檢修造
同三年九月戊午官符應無封神社令宜祝等修理度右有封之社應令神
戸百姓修造之狀下知已訖至于件社未有處分令被大納言正三位藤原朝臣國
人宣獨奉勅宜仰諸國自今以後令件等人永令修理每有小破即修之不
得延怠令致大破國司每年屢加巡檢若宜祝等不勤修理令致破損者
並從解却其有位即追位記白丁者決杖一百但遭風火非常等損難輒修

高野紀神護
景雲元年九月
乙丑始造八幡比
賣神宮寺其
夫者便役神寺
封戸限四年令早
功

造者言上聽裁とあり 此官符を按ふ此時始て制を立らば 小ありは令條小
城堡修造は兵士居民を役し燈燧は烽子を役せし神

社も神戸人を役使 類聚三代格小寛平六年六月一日官符小得紀伊國解

此國有封神社十一處所充封戸二百卅二烟可有正丁一千二百九十六人此則

依式每戸以五六人所率之數也とあり此戸口小准へて神戸役夫の數を知るへ

一戸五六口は十戸五六十 供神調度は上條不供祭祀幣帛飲食及

菓實之屬は供用あり祭祀の器物は調度あり此料小充るをいふ臨時祭式凡

神戸調庸充祭料並造神社及供神調度但田租貯為神税と見ゆ 其税

者一准義倉は祖税を貯へ收めて出舉せぬは義倉の制小准ふとあり 義倉は

名ふれん神税を貯へ置て息利を取らぬ動用の制小ありぬをいふ 集解小收官庫

義倉は賦役令出舉の義は雜令不委く辨へしるべし 不用他用又不出貸有乘者充臨時用途又令給之法如公解耳とあり 供神

成神主小令給は官人の公解法小同一と在文武紀不三分の一と神主小給は又多少を

量り給ふ全文は上イにて集解小内相宣曰自今以後神戸調庸者充供神用途及所殘

之數具令申然後給之亦如伊勢祖税出舉之類准令停之と委く見ゆれん

歲月を記した内相宣とありはお月つらうとあり 試みて藤原仲麻呂の紫

微内相小任せんと 註小租税二色は田より輸を貢賦の名して新舊を令ていへ

唯新穀を輸せし租 經年貯ふ穀を税と云のみあり 當年を租去年以 一准

義倉は出舉せぬ例をいふとあり 一は專と云 皆國司檢校は神戸のあり

此の國司あり其司よて神戸を檢校するを云 たは紀伊國あり神戸は紀伊

以上を其神祇官の檢校ふありぬとあり 申送所司は國司の田租調庸を檢校

をあり多寡の實を記し解状小輸物を副へ官小送るをいふ 申はきて陳牒の

所司は廣くいへる 詞よて國より大政官小申し官民部省小附け神祇官小送

るありむ戸令ふ凡戸籍云物惣寫三通二通送大政官一通國とあり二通は

官と本司あり租帳調庸帳も准へ知へ 猶戸令 式部式小神税帳造二通一

通送神祇官一通送省 省は民部 臨時祭式小諸國神税調庸帳云每半年

勘造送此官計會知實即付返抄あり
輸物は神祇官小收の返抄は民部省に付し 反抄は其国
 小省符を下及をいふ俗に請取
手形の類あり

勘造送此官計會知實即付返抄あり
 輸物は神祇官小收の返抄は民部省に付し
 反抄は其国
 小省符を下及をいふ俗に請取
 手形の類あり
 勘造送此官計會知實即付返抄あり
 輸物は神祇官小收の返抄は民部省に付し
 反抄は其国
 小省符を下及をいふ俗に請取
 手形の類あり
 勘造送此官計會知實即付返抄あり
 輸物は神祇官小收の返抄は民部省に付し
 反抄は其国
 小省符を下及をいふ俗に請取
 手形の類あり

天保十年八月記一ぬ

守良

天曆十年八月廿一日

卷一

